シンポジウム

「日本」の源流を探る
―「ヤマト文化」から「日本文明」まで―

モデレーター　伊東俊太郎
麗澤大学名誉教授、東京大学名誉教授、比較文明文化研究センター客員教授

レポーター　所功
モラロジー研究所道徳科学研究センター研究主幹、比較文明文化研究センター客員教授

コメンテイター　服部英二
モラロジー研究所道徳科学研究センター研究顧問、比較文明文化研究センター客員教授

欠端實
麗澤大学名誉教授、比較文明文化研究センター客員教授

伊東　それでは今日のシンポジウム「日本の源流を探る―「ヤマト文化」から「日本文明」まで」を始めたいと思います。ところで、この今日のシンポジウムは所先生がお書きになって、すでに『モラロジー研究』七十六号に発表されておられます、「古代ヤマト国家の形成過程論」をたたき台にして、皆さん一緒に考えようということです。この論文は大変優れた論文だと思います。

今までの古代ヤマト国家の成立に関する資料を、『古事記』『日本書紀』をはじめとして、韓国の『三国史記』、その他のものも参照され、そしてできる限り正確に歴史を再建するという試みをなさった大変立派な論文で、今後の議論のスタンダードになっていく、そういう基礎を作られたと、私は思う。しかしそれに止まっていてはいけないということで、それに対してわれわれが問題提起、質問などをして、さらに発展させていこうという事が今回のシンポの趣旨なんです。

ところで現在世界を考えますと、古代史というか、起源史ですね。イスラエル民族の起源とか、イスラムの起源とかね、それはいろいろなところにあるけど、それが大変動の時代を迎えているんですよ。今まで例えば、ユダヤ人の歴史というのを考えると『旧約聖書』、あれを歴史だと受け取って、あの通りにモーゼが紅海を渡って云々というようなことがずっと、書いてある。それが歴史だというふうになっていたんですが、今はそうじゃありません。そうではなくて、あの記述は一つの目的をもっているのですね。ヤハウェの神をどんなふうにイスラエル人が信仰し続けてきたか、信仰しながらどんなふうにして滅び、また再生しようとしているか、その目的を持って書かれているので、今の「歴史」というのとは違うんですね。ある一定の目的に沿って書かれているもので、ですから、これは客観的な意味での歴史とは言えないものがすごくたくさん入っているわけですね。それを今日ではもっと客観的に検証しようとして、「聖書考古学」という、考古学的検証が行われている。『聖書』に書いてあることが、本当にあったのかどうかを考古学的に発掘してみて調べてみるとか。それから次に、その当時ですよ、イスラエルじゃなくて、その周辺の人たちはどういうふうに彼らを見ていたかと、それがあるわけですね。例えば、エジプトにはイスラエルについて、エジプトの資料がありますね、アッシリアにもあるわけで。そういう周辺の資料から検討してチェックする。それからもう一つ、碑文、考古学的遺物がありますね。地域の発掘によって出てきた碑文。これは同じ次代に書いたものですから、これは間違いないですね。こういうものから検証しようということになって、今、イスラエル史は大変な事になっているわけですよ。『旧約聖書』でもうとても、ユダヤ人の歴史が書けるものじゃなくなっているわけです。フィンケルシュタインのようなユダヤ人の学者も聖書考古学に基づいてイスラエル史の書き変えを行なっている。イスラムも同様。イスラムは最初のマホメット伝は一〇〇年後ぐらいに書かれたんですよね、ずいぶん後なわけです。それは『コーラン』その他の記述によるものですが、歴史的には問題が多い。そこでやっぱり当

時のイスラムの周りにいる人たちが、どんなふうにメッカなどを語っているかという、その周辺の記述とつき合わせる。それからやはり考古学的な証拠ですね。そういうものを考えると、もう今までのマホメット伝で書かれているものでは全部が信用できないということが分かってきて、ロンドン大学のＳＯＡＳからそういう研究が始まって、プリンストン高等研究所のパトリシア・クローンなどという学者も参加して、みんなそういう書き直しをやろうとしている、大変動の時代ですよ。ですから今、歴史の、特に古代史、起源史については、日本史もそういう大変動期に入りつつあるんじゃないかと思う。それの先駆けにこのシンポジウムになればいいなというような気がしている。それには、しっかりとしたこういう所先生の研究のようなたたき台になるものが無ければダメである。ですから、これを大変貴重な研究成果として受け取った上で、そういう再検討をやっていこうということなんです。

それで会の進め方について簡単に述べておきます。まず、所先生に三〇分か四〇分、ご自分が考えられた古代ヤマト国家の形成過程について要点を述べていただいて、そしてその後、すぐ議論に入りたい。ですから議論の方が中心になるかもしれません。しかしまず、所先生のお考えを聞かなきゃいけませんよね。この所先生の集まりは二回目ですから、一回目にも出られている方もずいぶんいると思うんですが、そういう方でない、あえて今回初めてという人のためにはぜひ所先生のご発表をまず聞いてくださって、その上でわれわれの議論をきいて下さればと思う。最後にフロアからも質問を受け取ろうと思います。それじゃあ、所先生、どうぞよろしくお願いいたします。

縄文時代から弥生時代へ

所　トコロでございます。どうぞよろしくお願いいたします。今、伊東先生がおっしゃいましたように、私は先般、「ヤマト国家の形成過程論」というお話をさせていただきまして、それを文章にも致しました。それは歴史家として、過去四〇～五〇年にわたり学んできたことを踏まえて、学説史を整理するというようなことが中心でございました。

伊東先生は、これを一つの叩き台にしてとおっしゃいましたが、おそらくこれを叩き壊すというのが今日の意義かもしれません。多分いろんな異論が出てくると思います。私はそれこそ、学問のために必要なことであり、いろいろとご意見を拝聴して考えを深めたいと思っております。時間を三〇分余り頂いておりますけれども、大事なのは先生方のご意見を承り、またご来場の皆さ

まのご質問を承ることですから、なるべく手短に話させていただきます。

先般、今回のシンポジウムで最初の問題提起をするように立木先生から言われまして、これは大変なことだと思い、珍しく原稿を作りました。しかし、これをすべて読み上げたら約一時間かかりますので、あえてこれを破棄いたしました。その上で、今度はレジュメを作りまして、手書きのものを新任の久禮旦雄研究員に見せましたら、まだ詳し過ぎるんじゃないかと言いますので、これもごく簡単にはしょって、ご説明を申し上げます。

今日は「日本の起源を探る」というテーマであります。けれども「日本」という国名が成立しますのは、大体七世紀代です。しかし、今日お話しするのは、それ以前の「ヤマト」と言われていた時代が中心になります。

いわゆるヤマト時代の流れを大まかにたどった上で、そのヤマト時代に成立を見た伊勢神宮と出雲大社についてのお話を少し丁寧にさせていただきます。そこにみられる文化的な要素が、やがて文明的な要素へと進展する、そのいくつかのキーワードを若干説明してから、討論につなぎたいと思っています。

お手元の資料二枚のうち、一枚目は横書きの左側にややレジュメ的なもの、右側に年表がございます。

私は文献史学ですから、文字で書かれた時代を中心に歴史を考えてまいりました。それは、せいぜい五～六世紀以降ということになります。けれども、今われわれは、もっと長いベクトルで広い視野から歴史を論ずる必要があります。

日本列島はいつ頃できたのか、またその前はどうであったのか、それ以後どう変わったのか、ということも考えなきゃいけないだろうと思います。その場合、日本列島はもともと大陸と陸続きであったという、そういう時代に多くの人々がここへやってきて住むようになったわけですから、数千年以上前の縄文時代にまでさかのぼって考えなきゃいけないと思っております。

先ほど昼食をご一緒しながら話しておりましたら、欠端先生が、縄文時代は森の文化、木の文化だと言われて、まさにその通りだと思います。例えば、われわれ神様を数える時に、「一柱」といいますが、これも森の文化、木の文化の名残であろうと思われます。そういうことを、われわれは『古事記』『日本書紀』の中から読み取って、日本の文化文明を論ずることも大きな課題であります。

大まかに申しますと、この縄文時代から弥生時代にかけての歴史は、一つにつながっていると認識しています。かつては、縄文人を追い出して弥生人が日本列島を占拠したような議論もありま

した。けれども、いろんな研究が進みまして、縄文的な要素が弥生的な要素の中に溶け込み、融合している。決して一方が他方を駆逐したり、制覇したというようなことでないようです。

そうであれば、われわれが弥生時代以降を考える場合、縄文的な要素がどう受け継がれ組み込まれているかということも、念頭に置く必要があります。とりわけ縄文時代には、母性を尊重するような要素が濃厚であった。それが、弥生時代以降、だんだん父性中心になった。特に中国などの影響で、父性中心の社会になったようにみてよいと思われます。

弥生時代の研究はずいぶん進みましたので、今日は、そういうことも後ほど議論に出るかと思います。けれども、やはりここでは弥生時代以降の、特に稲作が九州で始まり、日本列島に広まったころを中心に考えてまいります。

津田左右吉博士の一貫した見解

その場合、かつては『古事記』『日本書紀』をほとんどそのまま歴史と考えた時代がありました。一方、戦後それを全く否定して反対に、『古事記』『日本書紀』を抜きにして、中国や朝鮮の史料に基づいて議論するという傾向が顕著になりました。その間にあって、戦前から『古事記』『日本書紀』を徹底的に批判されながらも、それらを活用して独自の古代史像を描かれたのが津田左右吉博士であります。

津田博士が、どんな考えを持っておられたのかということは、研究者の間でも十分認識されてこなかったのではないか。かつて厳しく『古事記』『日本書紀』を批判されましたから、津田さんは記紀を信用してないんだと思われがちです。しかし、そうではありません。文献批判をした上で、そこから何が読み取れるかということを考えておられます。

特に昭和二十一年（一九四六）早々、今から七〇年前に書かれました「建国の事情と万世一系の思想」というタイトルの論文があります。これは、岩波書店から出始めた『世界』という総合雑誌の昭和二十一年四月号に掲載されたもので、実に驚くべき論文だと思います。

同じ年の十一月三日公布された今の憲法に、「天皇は日本国の象徴であり、日本国民統合の象徴」と定められていますが、津田博士はすでに一月段階で書かれたこの論文に「象徴」という言葉を使っておられます。日本の天皇は、日本人にとって日本国家にとって象徴的な存在である、ということを歴史的に立証しようとされた論文であります。

津田博士の結論は、年表の下に引いておきましたとおり、①か

ら⑦に及びます。まず①九州地方の諸君主が得たシナの工芸品や種々の知識は、早くから後の近畿地方に伝えられ、一～二世紀ころ、その地域に文化の中心が形づくられた。そこには、その地方を領有する政治的勢力の存在が伴っていたことが考えられる。つまり、すでに一～二世紀の段階から、近畿地方に中心的な政治的な勢力が存在していた、という考えです。

しかも、②この政治的勢力は、皇室の御祖先を君主とするもので、ヤマトがその中心となっていたであろう。現在の皇室の御祖先が、すでに一～二世紀頃から近畿ヤマトに勢力を持っていたということを、すでに認められておられたのです。

ついで、③三世紀には、その領土が次第に広がって、西のほうでは瀬戸内海の沿岸地方、東は東北地方でもかなりの遠方まで、その勢力範囲に入ったらしく想像されるが、九州地方にはまだ進出することができなかったとみておられます。

実はこの辺が津田博士独特の説であります。皇室の御祖先は、もともとヤマトにおられたのであって、九州から移ってこられたんじゃないという考え方です。だから、まだ三世紀段階でも、畿内ヤマトの勢力は九州に及んでいなかったことになります。

しかし、④四世紀に入ると、ヤマト朝廷の勢いは九州地方まで進出し、ヤマト(邪馬台)の国を服属させたらしい。いわゆる『魏志倭人伝』にみえる、邪馬台国は三世紀が中心でして、四世紀に入ると、ヤマト朝廷により滅ぼされたと考えられております。

ともあれ、三世紀から四世紀にかけて、畿内にヤマト朝廷の勢力が存在し、東日本にも九州にも勢力を伸ばしていったという考え方であります。

さらに、⑤その勢いを進めたのが、四世紀の後半におけるヤマト朝廷勢力の（朝鮮）半島への進出です。それによって、朝廷に採り入れられたシナの文物、具体的には漢字とか儒書などですが、皇室の権威を一段と高め強めて、一つの国家としての統一を固めていく働きをすることになった、と見ておられます。

つまり、日本列島の中だけでなくて、その勢力が朝鮮半島にまで及び、朝鮮半島を経て中国の文物などが伝わり、それによって朝廷の権威を高めることになった、というわけです。

しかも注目すべきことは、⑥歴代天皇の系譜について、ほぼ三世紀の頃であろうと思わるスシン（崇神）天皇からあとを「歴史的の存在」として認め、それより前でも「創業の主ともいふべき君主のあったことは、何らかのかたちでのちに言ひ伝へられたかと想像せられる」と言っておられることです。

これが津田博士の説であります。戦後、かなり有力な学者たちがまことしやかに言ってきた津田説は、仲哀天皇以前をほとんど

架空の存在と否定していたという錯覚ですが、実際はそうでありません。すでに大正十年ころから、ずっと三世紀段階に崇神天皇がおられ、その前の事についても記憶が伝わっておった可能性がある、というふうに言ってこられたのです。

最後に⑦、そういうことであるから、「ヤマト朝廷以来の天皇は、国民的統合の中心であり国民的精神の生きた象徴であられるところに、皇室の存在の意義がある。国民の内部にあられるから、国民が父祖子孫相承けて無窮に継続すると同じく、皇室は国民とともに万世一系なのである」と結論づけておられます。

この最後の所は、ちょっと分かりにくいかもしれませんが、要するに「皇室は万世一系」だと言われてきたけれども、それは単に血縁的につながっているだけでなくて、多くの国民に理解され支持されていたから続いてきたのだ。そういう意味から、天皇が国家国民の象徴というのは、歴史的な帰結として当然そうなのだというわけです。

この津田博士が言われた事は、古代ヤマト国家の形成過程を論ずる上で、大変参考になります。ほぼ一世紀頃から近畿ヤマトに政治的な勢力があり、それが次第に勢力を広げ、三世紀から五世紀にかけて、国内のみならず海外にまで版図を伸ばし、それによって皇室の権威が確立し、日本的な統一国家が成立をしたという見方であります。

この津田説と私の結論は、かなり近いのですが、一つだけ大きく違う点があります。私は『古事記』『日本書紀』の伝える通り、大和朝廷の原勢力は九州から畿内に移ってこられた。その九州というのは、北九州だけでなく南九州にまで勢力を拡げ、そこに移っておられた神武天皇などが、やがて一世紀頃に畿内へ移られ、その子孫が二世紀から三世紀にかけて次第に勢力を固められた。やがて三世紀前半の崇神天皇朝には、この畿内から四方に勢力を伸ばしていかれた。ついで四世紀の初めころ、日本武尊の伝説で知らされるような形で、九州も東国も統一され、さらに四世紀の後半ころ、朝鮮半島まで勢力が及んだ、と考えてよいと思います。

これは別に目新しい説ではありません。今の高校教科書などにも、大体そういう流れが書いてあります。日本国内の統一がほぼ四世紀の初めであり、まもなく海外に勢力が及んだということは、ほとんどの教科書が明記しています。

ただし、小中高の教科書をみて不思議に思いますのは、中国の『漢書』『後漢書』『魏志倭人伝』など、また朝鮮半島の好太王の碑などを大いに挙げながら、『古事記』『日本書紀』はほとんど論拠に示されていません。それは、信ずるに足りないということで、頭から切り捨てているんじゃないかと思われます。

確かに、『古事記』も『日本書紀』も、今から一三〇〇年ほど前の八世紀初め、奈良時代の初めに仕上げられたものです。従って、それから数世紀以上前の事については、不正確な所があり、おそらく作為も修飾も少なくありません。

けれども、それは決して無から有を生じたわけではないだろうと思います。そこから何が読み取れるかということを、さきほど伊東先生がおっしゃいましたように、いろんな周辺の文献資料とか、また出土した考古の遺物・遺跡などと照らし合わせて、丹念に検証していく必要があろうかと思います。

そういう意味で、先般お話しさせていただいたことも、今日この年表にまとめてありますことも、『古事記』『日本書紀』を検証するためであります。

念のため、この右側のレジュメの二の頭に書きましたように、中国の編年史書に見える「倭」というものは何を指すのか、注意を要します。大体三世紀頃までは、九州のうち特に北九州辺りを「倭」と言っておったと思われます。

しかし、四世紀から五世紀には、近畿の大和を中心とする日本全体を「倭」と言っていることが読み取れます。同じ「倭」と言い、「倭国」と言い、「倭人」と書かれておっても、三世紀までと四・五世紀以降ではエリアが異る、という認識が必要だと思います。

その事を裏書きするのが、朝鮮の歴史書、および金石文等に見える「倭」の表現であります。特に四世紀の後半に百済から日本に送られた七支刀が天理市の石上（いそのかみ）神宮に伝わっております。また高句麗好太王の碑などを見ましても、四世紀段階には倭の勢力が朝鮮辺りまで及んでおったことがよく分かります。

三世紀前半の壮大な纒向建物遺構

そういう意味で、今申し上げました大筋については、通説に近いものと言ってよいと思います。ただ、ここ四〇～五〇年の間に長足の進歩を見せたのが、考古学の成果であります。これはもう戦前と比べものにならないほど、たくさんの成果が上がっております。

近年で一番驚いたのは、平成二十三年（二〇一一）、奈良県桜井市の纒向遺跡から出た壮大な建物の遺構です。この遺跡は大神神社のやや西北にありまして、そこから大きな建物遺構が出ました。戦後長らく発掘を続けてきた延長線上で確認されたものです。

これが本当に驚くべき内容であります。レジュメ二枚目の左側の上でありますが、西の方から東へ向かってＡＢＣＤと四つ建物

が並んでいます。その一番右側、東の方に建物Dというのであります。このDの建物が極めて大きいのです。この建物は何であるか。また西隣の建物Cが何であるかということにつきまして、いろんな議論があります。

まず大切な事は、伴出土器などによりまして、これが三世紀のほぼ前半、三世紀の初めから中ごろということが確定されたのです。そうしますと、三世紀前半ごろにこれだけの大きな建物を建て得た勢力は何なのかを明らかにしなければなりません。

そこで、よく周辺を見ますと、この建物遺構Dの北側と南側に広い河道跡がありますから、川が流れていたはずです。そのいわば三角州の微高地に建っていた建物だということがわかります。これは『古事記』『日本書紀』にみえる「師木の水垣の宮」＝「磯城の瑞籬宮」という言葉にピッタリあいます。とすれば、この水垣の宮こそ崇神天皇の宮殿であろうとみることが出来ます。

しかも驚くべきことに、その建物が非常に大きいだけでなく、ほぼ田の字型に仕切られるような住居様式だということです。これがまた重要な議論を呼びまして、ここでどういうふうに住まわっておられたのか、ここでどういう「まつりごと」（祭事も政治も一体）を行われていたのかということです。

これを考える上で、大事な手懸りは、これと実によく似ているのが出雲大社だということであります。この事にいち早く気付かれたのが、神戸大学教授で建築史の専門家である黒田龍二先生です。この方が、これはあの大きな出雲大社の内部構造にほとんど一致する、ということを真先に言われました。

レジュメの右側を見ていただきますと、真ん中辺りが出雲大社の復元模型です。その右側に平面図があります。出雲大社へお参りになった方は、南から北を向いて拝まれるのが一般的です。しかし、ご本殿の神様は、横向いておられます。

出雲大社の神主さんは、南側東寄りの階段を上がられますと、ちょっと西向いて行かれ、また北向いて進み、そこで東向いて座られます。その東奥に御神座があります。つまり神様は、この建物の北東の隅に祭られており、東から西向き、日本海の方を向いておられます。

このような出雲大社のご本殿の基本構造と纒向遺跡から出てきた宮殿遺構の構造が近似しているということを、黒田先生が初めて指摘されました。

ここで思い出されるのが、『古事記』にみえる有名な出雲の国譲り神話です。また垂仁天皇朝の記事によれば、出雲大社というのは、国譲りをされた大国主命の意思により、あるいは出雲側の要求によって、国譲りをする代わりに、大和の宮殿と同様の立派

な神殿を建てることを条件として、妥協されることになります。

それゆえ、大和の宮殿と出雲の大社が類似していることは、まさに『古事記』『日本書紀』で神話として知られる伝承を裏付けるものだ、ということになります。細かい所はさておいて、この黒田説は真に卓見だと思います。

しかも、さらに驚いた事は、この建物Dの西隣に少し小さい建物Cというのがあります。このCの北と南に、小さな柱穴が見られます。これは棟持柱といいまして、屋根の棟を持ち上げるため、両脇に太い柱を立てる建物は、弥生時代の各地の遺跡からたくさん遺構が出ております。この棟持柱を今もきちんと立てているのが、伊勢神宮の天地神明造にほかなりません。

そこで黒田先生は、この建物Cは、伊勢神宮の原型ではないかと指摘されたのです。レジュメ右側の上に挙げてありますとおり、伊勢神宮の中でも、とりわけ神明造の古い姿を忠実に示すのが御稲御倉（みしねのみくら）です。これは毎年お初穂を納める蔵です。その両脇に棟持柱が立っております。あるいは外宮の御饌殿（みけでん）にも両側に棟持柱が立っております。そういう原型を示すのが、この三世紀前半の纒向遺跡から出た建物Cだというわけです。

纒向遺跡がほぼ三世紀前半であることは間違いありません。しかも、ここにある建物遺構から知られることは、Dが崇神天皇の宮殿跡とみられ、またCが伊勢神宮の原型とみられると言われました。私は初めそこまで言えるのかなと思っておりましたが、だんだん考えているうちに、黒田説の結論は大筋認められてよいと思うに至りました。

このように私どもは、考古学から学ぶところが極めて多い。それを『古事記』『日本書紀』なり、あるいは内外の諸史料と照らし合わせることによって、いろんな事が分かってくるのです。

五世紀の画期的な雄略天皇朝

あとは時間の都合で説明を簡単にします。これまで、三世紀の話を中心にしてきましたが、もう一つのエポックは五世紀であります。五世紀の大和朝廷で主要な存在は、雄略天皇という方です。レジュメの二の下の方に、皆さんよくご存じの『万葉集』で一番最初の歌をあげておきました。これは雄略天皇の御製だと言われております。本当にそうかどうかは別として、雄略天皇の御製として『万葉集』の編者がこれを巻頭に置いたことに意味があると思われます。

日本人の歌は、五・七調か七・五調が基本です。また、沖縄の琉歌などは八六調と言われますけれども、それに少し似ているところもあります。要するに、かなり古い歌の形式がここに残って

おるということ。しかも、これが嬬恋の歌、つまり恋愛歌のようなものであります。そういうものが雄略天皇のお歌として伝わっているのは、雄略天皇が古代人にとって特に偉大な存在だったからだと思われます。

ちなみに、今から四〇年ほど前に、埼玉県行田市の稲荷山古墳から出た刀の銘文が最新の技術で発見され、一一五文字すべて解読できました。それを見ますと、すべて漢字で書かれておりますが、西暦の四七一年に当たる「辛亥（しんがい）」の年に刻まれた銘文です。それを読みやすくしますと、こう書いてあります。

「辛亥の年七月中記す。乎獲居（おわけ）の臣、上祖の名は意富比垈（おおひこ）」――ここに、意富比垈という人名が出てまいります。この意富比垈というのは『古事記』『日本書紀』によりますと、崇神天皇のおじさんに当たる大彦命（おおひこのみこと）でありましょう。こういう方が実在されたかどうか。「オオヒコ」なんていうのは、一般名詞だと思われ、戦後ほとんど否定的でありました。

しかし、ここには固有名詞としての「意富比垈」が記され、しかもオワケノオミから八代前の先祖として記されています。この銘文は五世紀後半の資料ですが、そこから八代さかのぼったころに、大彦命が実在したであろうことを推定できるようになったのであります。

さらにオワケノオミは「世々杖刀人の首となり」とありますから、朝廷に仕える護衛官の長として、「奉事し来たり今に至る」ということであります。しかも、それは「獲加多支鹵大王」の時です。この「獲加多支鹵」というのは、記紀にみえるワカタケル、つまり雄略天皇であります。この雄略天皇が「斯鬼宮（しきのみや）」におられ天下を治めておられたころ、それを「杖刀人」として助けてきたと、みずから手柄を刻んでおります。

この乎獲居の臣は、大和にいた人なのか、あるいは武蔵地方の有力者なのか議論があります。けれども、いずれにせよ、五世紀段階で「獲加多支鹵大王」と称される雄略天皇がおられ、その大王に仕えたオワケノオミから八代前の先祖に大彦命が実在した、ことなどが分かってきたわけです。

さらに早くから知られていたことですが、中国の『宋書』によりますと、この雄略天皇が四七八年に宋へ使節を遣わし上表文を奉られた。その中に、この雄略天皇とみられる「倭王武」が、「昔より祖禰（そでい）、躬（みずか）ら甲冑（かっちゅう）を擐（つらぬ）き、山川を跋渉（ばっしょう）して寧処（ねいしょ）に遑（いとま）あらず。東は毛人を征すること五十五国、西は衆夷を服すること六十六国、渡りて海北を平ぐること九十五国、王道融泰なり」と説明しています。

この五世紀後半段階で、自分たちの先祖は、まさに身を挺して

東奔西走し、国内を統一するのみならず、朝鮮半島まで勢力を伸ばしているということを、堂々と中国の皇帝に主張して、その領有権ないし支配権を認めさせようとしていたことがわかります。しかも、これが日本側でなく中国側の史書にみえるのです。

これらを総合しますと、まさに大和国家、ヤマト王権の成立発展史上、三世紀が大きなエポックであり、もう一つは五世紀がもっと大きなエポックだということがはっきりしてまいりました。

「ヤマト」「倭」から「日本」へ

そこで、もう少しさかのぼってほぼ一世紀段階を考えてみますと、まさにそのころ初代の神武天皇が九州から畿内へ移ったであろうと推定されます。

その大和でだんだんと基盤を築いたヤマト王権は、三世紀から五世紀にかけて国内を一つにまとめあげた。その過程で、「ヤマト文化」と称し得るものが成立したのではないか。それがベースとなり、やがて中国大陸、朝鮮半島の影響を受け、とくに漢字という文字を使いながら、「日本文明」を築き上げたのではないかとみられます。

われわれは「大和言葉」を古くから使ってまいりました。今も使っております。それは相当古くからあったでありましょう。レジュメの上の方に書いておきましたけれども、服部四郎という日本語学者が、「すでに縄文時代において全日本に日本語系統の言語が広く分布しておった」と言われています。そういう意味の大和言葉は古くからあったにちがいありません。

しかし、それとは別に、中国から朝鮮を経てきて入ってきた漢字文明が、日本語に大きな影響をもたらしました。例えば、儒学がそうであり、仏教がそうであり、律令がそうであり、年号がそうであり、漢詩文がそうであります。漢字を使ったそういうスタンダードな文明というものが、大体五世紀頃から次第に広まって、それが大きな意味を持っています。つまり、古来の大和言葉と外来の漢語・漢文というものが両々相まって日本文化を文明化してきたということが言えるだろうと思います。

そうしたいくつかの参考例を挙げておきました。例えば、われわれは「日本」という国名を使っております。これはどうして成立したのか。もともと「倭」とか「ヤマト」と言われていましたのに、何故「日本」と言われるようになったのかということです。

それにはすでに早くから中国の人々が、東の方から「日」（太陽）が昇り、その「本」に豊かな列島があることを知って、「日の本の国」という見方をしていました。それが朝鮮半島を経て当方へ伝わり、日本側で自ら「日出る処」「日の本」と称するよう

になったと見られます。

まだ、いろいろ申し上げたい事がありますけれども、時間が迫っておりますので、これぐらいの問題提起にさせていただきます。レジュメの二枚目に書きました、伊勢神宮と出雲大社に関しても、いろいろ面白い事もあるのですが、それは後の楽しみに残しておきたいと思います。失礼いたしました。

伊東　所先生、どうもありがとうございました。大変明晰なご説明を頂いて、興味深い意見を簡潔にまとめてくださいました。これからディスカッションというんですか、討論というんですか、質問に入りたいと思うんですが、そのやり方についてはですね、私と服部先生と欠端先生、三人が質問者になります。それを私から始めて、服部先生、欠端先生と行きますけれども、こういうふうにしたいと思うんですね。私の発言に対して、所先生お答えくださいますよね。それについて、お二方が何か意見があったらどんどん入ってくださっていいです。つまり私が言い終わってから発言するというのじゃなくて、何か問題性を感じたらどんどん入り込んでくださって、私も入り込むというような、そういうふうにやった方が面白いし、後から言うとなると、忘れてしまうということもあるんですね。だからすぐに思いついたら手を挙げられて、「それについては、こう、私は思う」とか言っていただいて、そういう形で進めていきたいと思います。

私からまず始めますが、これから申し上げることは、先生のご論文を拝読いたしまして、それについて申し上げようと思うんですが、ちょっとあらかじめ申し上げておくと、それは先生の御意見に対して、私は反対だというんじゃないということ。ただここはどうですかということを質問しておいた方が、今後の発展のために良いと思うんですよね。私の質問は多分私一人のものじゃないと思います。私のように感じる人はここにもおられるだろうと思うし、日本史の学者たちの間でも、ずいぶんいると思うんです。それを代表する形で申し上げるわけです。それに対してお答えいただいておけば、これは所先生のためにもなるわけです。だからそういう意味での対話だということを、ご承知いただきたいと思います。

「ハツクニシラススメラミコト」

それでは早速、質問に入ります。第一の質問はですね、こういうことなんです。大きく言って、私は二つ質問しようと思います。あんまりやるともう私だけで時間を取ってしまう。二つに絞ろうと思うんですが、その一つはですね、つまり神武天皇の事な

んですよね。そして崇神天皇の事なんですが、両者とも「ハツクニシラススメラミコト」ですね。「日本を初めて治めた天皇」ですね。それが二人いるんですよ。一人は神武天皇でそれが「ハツクニシラススメラミコト」と言われているし、崇神天皇もそう呼ばれている。これはどうしてなのでしょうか。始めた人が二人いるというのは、一体どういうことなんでしょう。こういう質問で、これは誰でも気がつくことですが。

それで私の仮説をまず言ってしまうと—所先生に反論なり何なりがあれば、それをお伺いしたい—私はですね、神武天皇と崇神天皇は離れていないという考えなんです。つまりその二人は、実はお一人であったのかもしれない。こういう可能性が一つですね。「ハツクニシラススメラミコト」、一番初め、都市的な文明と言ってもいいものを、つくり出した。ここに書かれた水垣の宮みたいなものが突如としてあんな立派な物がボーンと出てくるということに、驚きを禁じ得ませんね。だから私は神武・崇神とつなげてしまって、これを結び付けるんです。お一人かもしれない。あるいはお二人かもしれないが、お二人の場合は先駆者とその後継者である。だから神武天皇の後継者が崇神天皇ということになります。それで、神武・崇神王朝がですね、どんなふうにしてできたのかというと、詳しくは述べませんが、私は津田説とは異なり、南九州が問題になると思うんですね。そして南九州の狗奴という国がありましたよね。邪馬台国と戦ったという。あれも私は次のようにと考えてみる。これはこれまで言った人がいないかと思う、多分ね。だからそれは日向、西都原の古墳もそれなんかと関係あるわけですが、天皇家の歴史と関係があると、私は思うんですが。それがですよ、邪馬台国と戦争していたんです。それで邪馬台国を破ってそれを吸収して、統一したと、こう考えるわけです。ヤマトがだから西から東へ移るんですけど。西のヤマトを吸収しているんですが、実は以前の敵なんですね。だからこういう関係でヤマト王朝史には邪馬台国は現われません。これはそっちに目を向かれちゃ困るわけです。ですが、実際は中に入っていると、こういう考えなんです。そうするといろんな事が分かってくるような気がする。

そうすると、当然、次の神武と崇神の間にある八代の天皇は一体どういうことになるんだ。これは「欠史八代」といわれています。「けっし」というのは歴史を欠いていると。あそこは天皇のお名前とそれからいつお生まれになって、亡くなって、どんな人と結婚されて子どもがどうで、どこに葬られただけですよ。他にほとんど記述が無いんです。神武天皇がもしもですよ、一世紀にですね、大革命をやったとしたら、その次の世代は大変な事をし

なきゃならないはずです。神武、綏靖（すいぜい）、安寧…ですか、あの世は忙しくてしょうがないはずなのに、何も書いていない。名前だけ。そういう中身が何も無い。だから私は「欠史八代」はいなかったとは言わないですが、それは実のところ神武・崇神王朝を建てるに貢献した豪族たちなのではないか。例えば、葛城（かつらぎ）とか、和珥（わに）とか。かれらは後の豪族の祖先ですよね。神武天皇の年代を何とか理由をつけてあんなに早く、紀元前に持ち上げちゃった。一人を二人で分けて。日本は古いですよと言うために上げちゃったのはどんな動機ですか。

所　中国伝来の辛酉革命説をとりいれて、六〇〇年以上もさかのぼらせてしまったのです。

伊東　そういうわけですね。さかのぼらしちゃって、そのために、間を埋めなきゃならないですね。それで大和王朝の成立に協力した豪族たちを並べておいた。大和朝廷の初期は、そういうふうにして「欠史八代」になったというのが私の考えです。これは必ずしも一般的ではないかもしれません。豪族たちを並べたという考えはね。それについて先生のご意見をまず最初に。

いわゆる欠史八代

所　ありがとうございます。先生がおっしゃられます事は、そういうふうに解釈することも不可能ではないと思われます。

しかし私は、常識的に考えて、『古事記』や『日本書紀』の編者が、神武天皇と崇神天皇を同じく「はつくにしらししすめみまのすめらみこと」ということに矛盾を感じていたら、このように書かなかったと思います。それをあえて書いたのは、よく普通の会社とか事業でもみられることですが、小さな個人商店から始まり、やがて大きな株式会社になった場合、個人商店を始めたのも創業の人、株式会社を始めたのも創業の主、ということがありえてもいいと思われます。

もちろん、今年が皇紀で二六七七年だというような数え方は、中国伝来の讖緯（しんい）説に基づく無理な逆算の編年ですから、それを外しますと、大体一世紀段階にまず九州から畿内へ移ってくる理由があったようです。中国は、前漢から後漢へかけて大変動の時期でして、そのころ朝鮮半島から九州に向けて、海を渡ってきた難民もおれば、武力を持って入ってきた者もいたでありましょう。そういう外的な要因もあって一世紀の初めころに、九州から新天地を求めて畿内へ移ってくる勢力があり、それが神武天皇ではないかとみられます。

しかし、九州から本州への移動は、決してこれが初めてではありません。例えば、『古事記』『日本書紀』の神話にも出てきますように、出雲氏の先祖は、それよりも早く九州から畿内に移っていた可能性があるのです。

伊東　それにニギハヤヒノミコトも。

所　出雲氏の奉ずるアメノホアカリノミコトや物部氏などの奉ずるニギハヤヒノミコトは、ニニギノミコトの天孫降臨に先だって降臨されたと伝えられています。それは、九州の勢力が畿内に移った歴史の反映とみられます。しかしながら、それは失敗しています。ヤマトにいた強大な三輪氏の勢力に取り込まれてしまったようです。しかも出雲氏や物部氏は、三輪氏と共に、後から来る神武天皇に反抗するような勢力になっていたのです。

そういう段階では、神武天皇がヤマトに入られても、すぐに勢力を伸ばすことができません。そこで、記紀の皇統譜を見ますと、初代の神武天皇から八代・九代までの后妃は、ほとんど磯城の県主という在地有力者の娘をめとっておられますから、いわば政略結婚です。外来のヤマト勢力が在地のシキ有力者と手を結んで、徐々に勢力を築いていかれたとみられます。

そのために一〇〇年から二〇〇年を要して、三世紀前半段階の第一〇代崇神天皇あたりで、ようやく基礎が固まります。后妃も皇族などからめとられるようになり、さらに皇族将軍を各地へ派遣されるようになったわけです。そこで、崇神天皇も第二段階の創業主というふうに認識されたことに、むしろ意味があるとみられます。つまり、ヤマト国家の成立と発展段階で画期的なエポックとして、神武天皇と崇神天皇が考えられたのだと思われます。

もう一つ、先生がおっしゃいますように、二代目から九代目まで『古事記』にも『日本書紀』にも記事がほとんどありません。日本で初めて歴史書が編纂されたのは、六世紀の欽明天皇ころだとみられています。五世紀初めころに漢字が伝わり、やがてそれ以前の口承伝承などを記録することになります。

その伝承として最も顕著な事績のうち、神武天皇とか崇神天皇については、先祖の英雄物語が数多くあり、それが非常に印象深く語り伝えられた。けれども、その間の八代については、せいぜいご両親や后妃がどなたであるとか、あるいはどこで即位されたか、というような最小限の情報しか伝わっていなかったのだろうと思われます。

確かに欠史八代と言われるような時代については、もっと知りたいところですが、平安時代の初めにできました『新撰姓氏録』

を見ますと、この欠史八代の孝元天皇とか孝霊天皇を先祖とする氏族がいっぱい載っています。これは驚くべきことでして、その方々をわが先祖と言う氏族が、少なくとも八世紀段階から九世紀の初めにかけてたくさんいたということです。

江戸時代の初めにも、戦国武将たちは、自分たちの先祖をいろいろ名乗ります。例えば、前田氏は菅原氏の子孫だと言う。これは本当かどうか分からないのですが、大事なことは、菅原氏がいたからこそ前田氏はその子孫だと称しえたわけです。そうでなければ誰も信用しないはずです。その菅原氏の顕著な功績があるからこそ、前田氏はその学問を受け継いだ子孫だと誇ることができたのです。

こういうことが江戸初期にもありましたが、同様に恐らく『新撰姓氏録』が編纂されるころまでに、わが先祖は孝元天皇だ、孝霊天皇だ、開化天皇だと言って、一族の誇りとすることができたのは、やっぱり実際そういう天皇がおられたからでありましょう。そういう意味で、決して架空の系譜ではないと思っております。

伊東　分かりました。確かにそういう風に考えられると思う。しかし私は逆でしてね、つまり後の豪族たちがみんな自分の祖先は、その欠史八代につながるというような、いわばそういうふうに言いつのった。そう言い立てられ得たということが「欠史八代」の実体が豪族たちなのではないか、という逆の考えになります。次は、私の二番目の質問に入ろうと思うんですが、その前にコメンテーターの方に何かあれば、それを言っていただいて、次に私の質問に移ろうかと思います。まず服部先生どうぞ。

服部　今日のテーマは「日本の源流を探る」と、「ヤマト文化から日本文明まで」ですね。これは非常に大きなテーマで、日本文明というものがどうやって形成されたのかということを俯瞰できる討論にならなきゃいけないと思っています。所先生の「ヤマト王朝の形成過程論」という論文は、非常に優れた内容で、私も感心した論文です。ですからそれについて今やっていくと、これだけでも二時間か三時間かかる。それから伊東先生の提出された問いもそうです。私は、日本の源流を探るにはやはり地球規模でものごとを考えるべきだと思います。所先生も、日本が陸続きであった時までさかのぼって考えてなきゃいけないとおっしゃった。つまりそのように大きな地球史的な見地から見たとき、日本がどういう所に位置するのかということについて、やはり限られた時間の中ですが、少し申し上げてみたいと思うのです。

そこですこし考えてきたのですが、六つの視点から私は日本を

見ていきたい。一つは言語学的アプローチ。次に建築学的アプローチ。それから風俗・習慣からのアプローチ。それから地名が語るもの。そして海洋史観です。「海こそが道」という考え方です。そして最後にやはり言霊（ことだま）という問題に行きたいと思うのですが、どれだけ時間を頂けるか分からないので途中で切ってください。

日本語のルーツ

実は、日本という国は、特殊な文明であり、日本人は特殊な人間であると思っている人が相当います。それに輪を掛けたのが、今から四〇年ぐらい前に出た、角田忠信さんの『日本人の脳』という本ですね。それで見ると日本は独自だということになる。彼はヨーロッパのジブラルタル海峡から対馬海峡まで脳は音に対して同じ反応をしているというのです。ところが対馬海峡を越えて日本列島に入ると俄然、日本人の脳というのは違うという、これが角田さんの言ったことです。俄然、そこで違う、と。すごいですね。日本対ユーラシアですよ。言い換えると、人類対日本人ぐらいに分けちゃったのですね、角田先生は。難聴の専門医である角田さんはユーラシア人がすべて、右脳で捉えている音を日本人だけは左脳で捉えるということを発見したのですね。例えば、谷川のせせらぎの音、虫の声、松風の音、こういう音は、ヨーロッパ人をはじめ韓国人まで全部、右脳で捉えているのですが、その音を日本人の場合、彼の分析では左脳で捉えている、という。それは何故かということなのですが、それらの自然の音が彼の測定器の中で母音と同じ曲線を描く音だと分かったのです。原因は日本語が母音優位の言語だからだ、ということになるのです。角田さんは、従来右脳はパトス脳、左脳はロゴス脳とこういうふうに言われていたのを、日本人に限って右脳は「モノ」、左脳は「こころ」というふうに分けたのです。私はそれを非常に面白いと思ったので、モントリオールで開かれたユネスコの会議に呼んだのです。角田さんの発表は大いに受けて、それは世界三三か国で同時発刊されていた『ユネスコ・クーリエ』という雑誌にまで掲載されたのです。私もコメントを書いていますが。

しかしその時、私が角田さんに言ったことがあるのです。「これは、面白いけれど、日本人以外は全部同じだという結論になっていますね、あなたはポリネシア人の脳を分析しましたか」と言ったら、「していない」と言うんですよ。それでぜひやってくださいと言ったら、数年たって、何とあの方は私に「ポリネシア人の脳を調べてみました。日本人と同じでした」と報告してきたのです。面白かったですよ。

これが言語学的なアプローチの第一です。母音優位という、日

本語の特徴なのですが、それが自然に対する心情に対応している。ところがポリネシア人もそうなのです。ここに日本人の祖先の一つのルーツが見えてくる。それに大野晋先生ですが、伊東先生も私も議論の機会が多々ありましたが、あの方はタミール語が日本語の元だということをたくさん書いたから、普通はそのことしか問題にならないのですが、大野さんの『日本語の起源』という本をよく読んでみると、やはりその前に日本語に基調音がある、と書いてある。ベーシックラングイッジはオーストロネシア語だ、と書いてあるのです。つまりポリネシアなんですよ。母音優位の例は、Aloha Oe。この語に七つの文字が出てきますけれども、その中で子音は二つでしょう。Waiakeaといってもそうですよね。タヒチ諸島の首都パペーテの空港名はTahiti Faaaaですが三つも並んでいます。

それからもう一つ、日本語とポリネシア語が非常に似ているのは、反復音です。これがマレー・ポリネシアの語族の特徴なのです。例えば、ポリネシアでは、ボラボラでマヒマヒを食べてと、こう言えるでしょう。その反復音というものは、東アジアの日本語の特徴で、その中でわれわれは生きている。例えば、ジメジメした天気、ワクワクする、ぐるぐる回る。雨がしとしと降る。雪がさらさら降る。あまりにも多いので、そろそろ、やめましょうか。こういうことですね。電話する時、英語だったら、hello、フランス語ならalloですが、日本では「もしもし」です。これはまた反復音でやっているのです。枚挙にいとまがないほど日本語には反復音が多い。その反復音の多さにおいて、やはりマレー・ポリネシア語族との関係は明らかです。

英語ではpersonの複数はpeopleです。日本ではどうですか。我の複数はわれわれ、人の複数は人々ですよ。インドネシア語ではどうなりますか。Orang orangですよ。オランウータンというのは森の人。オランが人で、人々がオランオランなのです。こういうふうにはっきり対応しているのです。これらのことを考えますと、このポリネア語系が基調となり、日本語というものを形成しているといってよい。それは日本人の起源を指し示すものです。ヤマト言葉の澄明さもこのオーストロネシア系の母音から来ていることになります。

では文法はどうかと言うと、ここに日本人が単なるポリネシア系ではない証拠が出てくる。文法から考えますと、日本語は、Altaic Languages、アルタイ系なんです。だから北方からのルートがあったということになりますね。特にアルタイ語族の中のツングース系の言葉が入ってきたと言語学者は言います。その文法的語順、つまり主語、述語、形容詞の並び方、これを見ますと、

やっぱりアルタイ系なのですね。アルタイ山脈というのはシベリアの中ほどですよ。そこに発して、朝鮮半島を経て日本までがアルタイ語族になっていますが、同じ語族が西の方に行くとトルコ語になります。大阪の民博に行きますと、同時に二〇カ国か三〇カ国翻訳する機械がありまして、そこに日本語を入れてみると各国語で語順と翻訳文が出るわけですね。私は日本語の文章を入れてみました。すると、完璧に語順が一緒の言葉があった。トルコ語なんです。構文が一緒になる。ということは、アルタイから出た民族がずうっと西へ移動していって、今のトルコつまりアナトリアに入ったのがトルコ民族になり、同じところから東に流れてきた一群が日本に到着したと、こういうふうに考えられるわけです。だからトルコ人が日本に抱いている特殊な親密感というのは、実は、エルトゥールル号の遭難だけではなしに、そういった数世紀をかけた民族の移動にも関わるのじゃないかなと思います。

伊東　服部先生、非常に面白いお話で、言葉の事ですね。そこで一区切りして、欠端先生が準備されてきた、何か言いたい事がおありだと思うんです。

縄文文化の多様性

欠端　やはり大局的には、今日のテーマはヤマト文化から日本文明まで、日本の源流を探るということだったと思います。そこで縄文から弥生への大きな動きですね、これを取り上げないと話にならないと思います。縄文は一万年続きました。これをどう見るのかということです。日本は縄文をどう受け取ったのかということですね。日本の場合、弥生以降で国家というものを形成して、先ほど、所先生がお話しくださったような経過で日本というものが誕生するわけですけれども、一万年続いたこの縄文文化を、例えば、伊勢神宮は受け継いでいるのかということです。実際は受け継いでいるわけです、はっきりと。こういう日本文化の在り方を見ていかなければならないと思います。それはいろんな観点から言えるわけです。縄文文化、あるいは原日本文化というのは南方性を有していて、今、先生からお話がありましたように、そもそも米というのは南方の作物です。この南方性的性格とさらに海洋的性格ですね。禊なんていうのは、海水でやるのが本筋です。海ですよ。それから自然崇拝と申したらいいのでしょうか、それが非常に顕著でありまして、そういう文化を、例えば、伊勢神宮は全部受け継いでいます。例えば、興玉神（おきたまのかみ）、二見が浦の海の神をちゃんと受け継いで、今まで大事に大事にお守りして

いるわけです。稲作の天照大神を祀ったら、海の神を捨てるのか、絶対捨てませんよ。さらにまた伊勢神宮で一番神聖な場所は心御柱（しんのみはしら）です。柱です、樹木です。これは樹木崇拝です。イネの神をお祭りするようになっても、それ以前の縄文の柱の文化、精神文化というものをちゃんと受け継いでいるわけです。こういう事が非常に重要ではないかなと思います。

それで端的に所先生にお尋ねしたいんですけれども、ヤマト民族は縄文人だったのか、弥生人だったのかということですね。いかがでしょうか。

所　私の専門ではありませんが、最近、いわゆる人類学の研究が進んで、いろんな人骨がたくさん出ています。京大名誉教授の片山一道先生がまとめられた『骨が語る日本人の歴史』（ちくま新書）なんか見ますと、明らかに縄文的な要素が弥生的な要素の中に融合しています。日本人は旧石器から新石器を含めてですが、その延長線上に縄文があり、縄文の延長線上に弥生がある。ひっくるめて「縄文弥生人」といってもよいのではないかと、私は思っております。

服部　欠端さんの問いは、日本人は両方の要素を絶対持っていると。しかしヤマト王朝はどうでしたかという意味です。

所　ふつう歴史家がヤマト王権を考える段階は、さかのぼっても一世紀以降、弥生以降ですから、これは明らかに弥生人であり、弥生人の流れを汲むものだということです。しかも津田博士は、もともと近畿大和に早くから勢力を持っておった者を中心に日本国内がまとまっていったという考え方です。

服部　津田左右吉さんの説でやはり気になるのは、北九州の前にヤマトがあったと、近畿ということになりますか。

所　縄文時代であれ、弥生時代であれ、古墳時代であれ、各地に有力な勢力がいたわけです。今言われた、九州地方だけでなく、中国地方の吉備あたりにも、近畿地方の大和にも、北陸地方の越にも、さらに東国地方にも、かなりまとまりを持つ有力な勢力がいたことは、考古学的にも明らかです。それらの一つで最も代表的なのが、皇室につながるヤマト王権だとみられます。

そのスタートは九州だと思いますが、やがて畿内を中心に展開されます。そういう勢力と他のグループとが無関係だったのかと言えば、さっき服部四郎という言語学者の説など紹介しましたけ

れども、縄文時代から日本国内で、大まかにつながるような言語を持っていた可能性が高い。ということは、いわゆる異民族の寄り集まりじゃなくて、一万年以上前に大陸から渡ってきたにせよ、この日本列島に定住して、何とか言葉の通ずるような人々が各地に集落を成しておったと考えられます。どこかでつながる広い意味での日本民族が、集団として各地に勢力を張っておった、というふうな理解をしております。

雲南と日本の関係

服部　ありがとうございます。私は欠端先生と一緒に雲南に行きました。そこで、今のヤマト民族の起源に関して聞きたいのですが、大変印象を受けたものがあった。後で詳しい事は欠端さんが言ってくれると思いますけれども。ワ族の村に行ったのです。その真ん中にあるのはね、寨心石というものなのです。これは聖樹信仰なのですよ。それは柱と石の組み合わせで、それが村の中心なんです。それを住民は非常に敬っているんですね。今、雲南では中国政府が建て替えろといって、昔の伝統的木造家屋を壊して、村ごと破壊してつまんないレンガ建築にしているんです。そういう悲しい場面も見たのですが、中央政府も村の真ん中にある寨心石だけには手を付けない。神聖だから。ところで所先生もご存じだと思いますが、樹木信仰の表れなのですけれども、伊勢の神宮に対して元伊勢というのがありますね。アマテラスが色々な所を回って最後に伊勢に行き着くという、その出発点は元伊勢つまり籠神社（このじんじゃ）ですね。私は丹波のこの神社に参りました。そこの奥の院に行ってこれが正殿かと思っていたら神職が、いやご神体はこちらですと言うんです。奥の院の横に繁みがあるのですね。木が生えて、岩がある、しめ縄が張ってある。それがご神体だと、こういうことを言われました。僕は衝撃を受けました。そういうことから見ますと、寨心石という考えとぴったりするのです。そうすると、雲南と日本が結ばれてくる。これがね、私が本当に驚いたことです。これはまたタイ族の方にも行きますから、ここでもびっくりした。これが日本の、先ほど欠端さんが言われた心御柱に通じているものじゃないかと思います。

　それからもう一つ、やっぱり雲南で驚くのは、七つぐらいの部族、少数民族の部落のあらゆる所にしめ縄がある。それから鳥居がある。しめ縄、鳥居、これ日本独特と思っていたのがちゃんとある。鳥居は村の入り口なんです。そして上に鳥が乗っている。まさに鳥居なのですね。それが雲南だけかと思っていたら、吉野ヶ里でもちゃんと鳥が乗っています、門の上に。ああいう形がちゃんと伝わっている。ですからやはり柳田国男が正しい。「海の

道」だと、そこから来ていると言っていいのではないか。福建省の方から黒潮に乗ればたどり着きますからね、北九州に。鳥居のほかにもいろいろな模様が同じ。そして餅がある。丸餅があって赤飯があって、納豆があって豆腐があって、これが関係無いと言えません。これは全部、稲の文化、弥生人と言ってもいいかもしれないけれども、長江の河口から黒潮に乗って到達したと。そう考えていいのではないかと思っています。

伊東　それじゃそこで、私へ戻していただいて、第二問に入って、所先生のお答えを聞いた後で、またお二人にお話を聞かせてもらいましょう。この二問だけで、私は終わりたいと思っていますが。今、お二人のお話を聞いて、非常に興味深かった。服部先生の音韻の問題、ポリネシア、つまりオセアニア的なもの。それと雲南の事ですね。そして縄文の問題を欠端先生が言われたけれども、それは大変重要な日本文化の基礎と考える。つまり日本文化は朝鮮との関係でね、半島との関係で考え方はずいぶんありますよね。これ日本人の研究者もいるし、韓国の研究者、北朝鮮の研究者もいるんですよ。だけど、縄文というこの基礎を考えると、ここで日本はやっぱり違ってくると思う。その根の上の方は、さっき文法はアルタイ系だと言ったけれども。そういう点ではつながるでしょう。だけど一番基礎にね、縄文があるということ。それを忘れちゃいけないし、あるいは忘れちゃいけないどころか、今でも、生きているかもしれないということですよ。でも、これ以上、話すとまた時間を取ってしまうので、第二問に行きます。所先生のご論文に戻ります。論文に対する質問ということで少し専門的になるかと思います。

日本武尊と神功皇后

第二問はですね、日本武尊と神功皇后という問題ですね。日本武尊については、日本武尊って、いろんな事やっていますね。九州から関東までその間の土地でも、やり過ぎっていう感じゃないですか、読んでいると。そうでしょう。それで私は思った。これは『旧約聖書』の「ヨシュア記」だなと。彼はカナンの地へ入ってくるんですよ、それで統一するんですよ。カナンといろんな部族と戦いながらね。それは一人でやったんじゃ実はないんです。そうではなくて、いろんな戦を、ヨシュア一人でやったんじゃなくて、いろんな人がやっていて、それをヨシュア一人にまとめたわけです。そういう事なんです。それと同じ事で、日本武尊一人が行なったんじゃなくて、やっぱりいろいろな伝承がいくつかあって、それを日本武尊という一人の人に集中させてまとめたとい

うことだろうと思う。それで理解できると思う。

問題は次の神功皇后の方なんです。もっと大きな問題はね。これはどういうことかと言うと、神功皇后の三韓征伐ですね。それが本当にあったのかどうかですね、この問題ですね。先生はやはりこういうすごいリーダーがいて、相当活躍したことは間違いないだろうと。好太王の碑とかその他の証拠もありますし、倭の勢力が入っていったということは間違いない。ところで、三韓征伐について感ずる疑問は、まずそれが期間が甚だ短いということね。十月五日に始めて十二月の十五日ぐらいに終わっているんでしょう。二カ月間ですよ、たったの。たったの二カ月間で三韓を征伐しちゃって、それで新羅の王様が、私はあなたの国の馬飼いになりますとか何とか言っているというのは考えられないというのが第一。それから第二点は、そういう大きな戦争が新羅にあったなら、『三国史記』の、新羅紀か百済紀、これに書いてあっていいじゃないですか、何かちょっとでも。何かこういう女性が来て、われわれ荒らしたとかね。何もない。一言も無い。この沈黙は一体どうしたことなんだろう。この周辺の歴史から考えてみると、これは一体どうしたことなんだろうという事があります。

それから第三番目は、そうね、何かね、ちょっとこの物語には意図が感ぜられると思うんです。これはね、応神天皇というものを、仲哀天皇の御子にしなければならないということ。これはつながってないかもしれないんです、仲哀天皇が神功皇后の御身はらまさせて応神天皇を生んでいる。こうしないと、これ続かないですよね。仲哀天皇というのは、ご承知のように惨めな死に方をして、あれで崇神王朝はまず終わったと考えていいと思うんですね。応神王朝また新しく見える。これをつなげようとする無理な意図が感じられるということなんです。だから私は歴史には意図があると言った。今度は『日本書紀』のあの箇所を全部読みました。『日本書紀』でも、『古事記』の方は非常に簡単、こっちは長いですね。長いけど、まずまず荒唐無稽と言っていいような話がですね、ずいぶん出てきている。ちょっと今からは信じ難いような。物語としては面白いでしょうね。物語としては、たしかに面白いけど。

服部　少しまた入っていいですか。歴史書には意図があるとおっしゃったのは全くその通りだと思いますね。全ての歴史書に大体そういう傾向がある。神功皇后の三韓征伐についてお話になりましたけれども、あれは非常に短期間です。これはこういうふうに考えたらいい。三韓征伐の時期は、もう百済と新羅は戦っています。

伊東　そうです。

服部　神功皇后は百済を助けている。こちらの方に同盟してますね。

伊東　その通りです。

服部　ですからあれは半島の戦いの中に援軍に行って、さっと帰ってきたと。それが大きく書かれたということじゃないかと思うのですけれども。大体この対馬海峡というのは道で、実際には半島と列島、つまり朝鮮半島と日本列島は、一つになっていたんじゃないかと思うんです。その中で新羅と百済、大体百済と新羅という言い方自身が、日本のヤマト王朝というのは、極めて百済系だということを示していると思うんですけれども。百済というのは、ペチェイでしょう。ペチェイがどうして「くだら」と呼ばれるのですか。クンナラですよ。クンナラというのは、「わが国」。だから「ナラ」という言葉も「わがふるさと」ほどの意味でしょう。

伊東　「クダラ」（khŏ:-da-rah）は大きいですよ、大きい国ですよ。

服部　大きな国、だからそうなります。

伊東　大きな国、だからね、われわれから見て、百済の人が日本へ来てですね、「大きな国」と呼んだんですよ、自分の故郷を。

服部　だからGreat Britainに似ているじゃないですか。ブルターニュとグランドブルターニューに似ているのです。そういうことでしょう。そうすると、「シイラ」の方は「シラギ」と言って、軽蔑語音を入れているわけですよ。あれは「シイラ」です。新羅日頭夜半に明らかなり、の「シイラ」です。それが「シラギ」となる。これは明らかに軽蔑語で言われて「シイラ野郎」というような感じになっている。この関係はつまり半島における抗争が日本に入ってきて、最初に百済が優位に立ったのです。そして新羅と結んでいた出雲を攻める、これは出雲族の国引きの話で分かるように、完全に新羅と結んでいますね。百済から来たヤマト王朝は、百済大社を立てている、百済観音を作っている。この王朝が出雲を従えるということは、半島とは逆の現象になっている。半島の方では、七世紀に統一新羅ができる、そういう関係に

あったんじゃないかと。その最中、約五世紀ぐらいにやっていた半島でのゴタゴタの間に神功皇后はやはりわが祖先という、親戚関係にある百済に出兵して助けたことがあったと思うのです。日本ではそれが大きく書かれたということじゃないですか。ですから、中国の方の本とか何かには出てきませんよ。

伊東　この辺についてちょっと所先生が、お答えくださっていいと思います。

所　だんだん面白くなってきましたね。伊東先生の問題提起も、服部先生がおっしゃった事も、非常に大事だと思います。

歴史書に意図があるのは当然の事なんです。歴史書を編纂するのは、例えば、『古事記』『日本書紀』ならば天武天皇から元明・元正両女帝あたり、大体七世紀の終わりから八世紀の初めにかけて確立した中央集権国家の由来を説明するため役立つことを中心にまとめたものです。従って、当然そこに当時の政府なり国家にとって都合のよい事柄を強調して書く、場合によっては架空の文飾まで加えることはあり得ると思います。

ですから、伊東先生のご質問にある最初の日本武尊の伝承ですが、これは確かにお一人の事績として広過ぎる大き過ぎるというのは、かなり昔から言われていることであります。

とりわけ、『古事記』に書かれていないことで『日本書紀』に見えるのは、九州への遠征に、まず景行天皇ご自身が行かれ、ついで日本武尊が行かれたことが書いてあります。それなら、景行天皇が行かれたのは、『古事記』に書いてないので全く作り話かというと、必ずしもそう言い切れません。

これは話がちょっと飛ぶようですが、「水戸黄門漫遊記」というのがありますね。水戸光圀は江戸と水戸にいただけでして、全国を回ったわけじゃないんです。しかし、水戸光圀の命を受けて、その依頼状を持って佐々宗淳（ささそうじゅん）とか安積澹泊（あさかたんぱく）という人が各地を周りますと、水戸黄門さんが来てくれた、ということになってしまうのです。

同様に景行天皇の命を受けて先遣隊が行っておったり、やがて日本武尊も行かれたということでも、まず景行天皇が行かれ、ついで日本武尊が行かれたという話として伝わった可能性もあると思われます。

もう一つはヤマトタケルノミコトです。『古事記』では倭建命、『日本書紀』では日本武尊と書かれています。これは倭＝日本の有力な武将ということで、一般名詞だという人もあるくらいです。しかし私は、さっき言いました大彦命と同様に、やっぱり固

有名詞化しておった有力な皇族出身の武将がいて、九州にも東国にも出られたと思います。

前に申しましたとおり、崇神天皇朝に四道将軍として、いずれも皇族たちが先頭を切って東奔西走されたという歴史が三世紀前半にあります。従って、日本武尊は四世紀の前半だと思いますが、勇壮な皇族が先頭を切って九州にも東国にも行かれた可能性はあります。それが一人か数人かは分かりませんけれども、日本武尊という英雄の物語にまとめられています。

これは『古事記』『日本書紀』だけでなくて、『風土記』にも、いっぱい出てきます。『風土記』というのは、記紀の編纂と同じころ、土地の言い伝えを記録して中央に報告したものです。例えば、現在の茨城県に当たる常陸国の『風土記』を見ますと、日本武尊は「天皇」と書かれています。ヤマトタケルノスメラミコトと書いているのは、やっぱり強力な皇族が来られて、この地を平定されたという伝承が古くから長く伝わっていたからだと思います。これらを見ますと、皇族が先頭を切って東奔西走されたという史実は、四道将軍のみならず、五世紀の倭王武の上表文を見ても、まさにあり得たと思われます。

ついで神功皇后につきまして申し上げます。さっき服部先生がおっしゃいましたように、日本古代の歴史を考えるのに重要なのは、朝鮮半島の動きだと思います。朝鮮半島では、大まかに百済・新羅・高句麗という三つが互いに争って、その三国とどう組むかということが、長らく日本の懸案事項でした。日本は主に百済と組んできました。けれども、ある場合には新羅と組む、あるいは場合には高句麗と組むということもありました。例えば、遣隋使の派遣など見ましても、もっと前の倭の五王の時代を見ましても、高句麗がどう出てくるかによって、中国側も日本に対する態度を変えるのです。

中国は朝鮮半島を植民地化しようとして手こずる。高句麗が強い、新羅が強い、百済が強いと、それじゃあ合従連衡、どこと組むかということになる。百済を抑えるために日本と組むというようなこともあったり、また新羅と唐が組んだ場合には、日本は百済を助けるために身を挺して出兵するというような、そういう複雑な関係です。

神功皇后の時に、九州へ遠征された目的は、これは熊襲が反乱を起こしたからこれを平定しようとして行かれます。ところが、熊襲というのは、新羅と結んでヤマト朝廷に抵抗していることを、神功皇后が夢のお告げで聞かれ、熊襲を討つより新羅を討つべきだというご託宣に従おうとされたのです。併し、夫君の仲哀天皇は、やっぱり目の前の熊襲をまずやっつけるんだと言われ、

それで傷ついて亡くなってしまいます。

ここはいろんな紆余曲折もあるのですが、大筋において読み取れるのは、九州と朝鮮半島の百済や新羅と結び付く勢力がいて、当時は熊襲と新羅が組んでいたことです。ヤマト王権は百済などを介して、新羅を何とか抑え込もうとしたという構図です。熊襲を抑えるためには、その背後にいて、組んでいた新羅を抑えなきゃいけない、ということになったのです。さっき服部先生のおっしゃった事で言えば、新羅と百済の争いをみて、百済を助けようとして新羅をやっつけるために出兵された可能性は十分あると思います。

問題は神功皇后自身が本当に行かれたのかどうか。これはよく分かりません。朝鮮の『三国史記』にも出てきません。そういう史実であるならば、ジャンヌダルクのような記録があっても良さそうなのに出てきません。しかし、窮地を救い得たのは、神功皇后のような女性がいたからだ、という伝承が日本側にあり、それを強調したのが神功皇后伝説ではないかと思われます。

ご存じだと思いますが、『日本書紀』というのは、天皇ごとに巻を立てることになっています。ところが、唯一、神功皇后は皇后でありながら、本紀を立てられています。一巻分、神功皇后のために本紀が立っているということは、天皇に準ずるというか、天皇と同じ扱いを『日本書紀』がしていることになります。ヤマト国家の成立史上、極めて重要な存在として、少なくとも八世紀初頭の段階で認識されておったにちがいありません。その方が実在し、その功績が大きかったので、ご本人が新羅にまで出向かれたという話もできた。しかし、本当に行かれたかどうかは分かりません。

最後に、われわれが歴史書の編纂意図をどう読むかです。『古事記』はいわば内向け、『日本書紀』は外向けだと言われ、私もおよそその通りだと思います。そのために『古事記』では、対外関係が緩やかに書いてありますが、『日本書紀』では非常に強調して書いてあります。

それはやっぱり『日本書紀』が編纂される段階で、日本が日本であるために、中国に対してこれほど強大な統一国家であること、しかも早くから海外にまで勢力を及ぼす存在であったことを強調する意図があったと思われます。それだけ背伸びをして、神武天皇をはるか昔にさかのぼらせ、あえてBC六六〇年に即位されたとか、神功皇后が朝鮮を征討するほどの国だと強調するような意図が『日本書紀』には顕著にみられます。

とはいえ、その建国伝承や征韓伝説が、単なるフィクションだとかゼロから作られたというようなことではありえません。やは

り、そういう史実の核があって、それを必要に応じて強調したのだろうと思っております。

東アジアの冊封体制

欠端　よろしいでしょうか。今、朝鮮半島の事が出ましたので、当時の東アジアの外交秩序をもうしあげますと、いわゆる中国の冊封体制です。その中に中国の周辺国が全部組み込まれているわけです。中国があって中心には、皇帝がおりまして、その中心の周辺に内臣が支配する領国があり、その外側に外臣が支配する領国群がある。さらにその外側に客臣がありますが、客臣は中国と対等平等です。客臣は匈奴しかありません。日本は五七年にこの外臣に入るわけです、初めて。外臣になると何か良い事あるのか？　あるのです。周囲から責められた時には中国が軍隊を出して助けてくれるのです。

伊東　それは何年ですか。

欠端　五七年。この年に倭の奴国が後漢の光武帝に朝貢使を送り、初めて中国の冊封体制のなかに外臣としての参加が認められます。そして光武帝からは「委奴国王印」の金印をもらいます。つぎに卑弥呼の時代ですが、この時中国（魏）の軍隊（軍人）が倭国に入ってきます。景初三年（二三九年）、卑弥呼は魏に遣いを出し、「親魏倭王」として金印紫綬をさずけられます。魏の軍隊（軍人）が日本に入ってきたのは正始八年（二四七年）、あたかも倭が狗奴国と攻撃し合っている時でした。帯方郡から張政が倭国に来て、皇帝の詔書・黄幢（軍隊の出動が認められたことを意味します）をもたらし、難升米らに告諭します。その間に卑弥呼が亡くなってしまったので、次の王、台与（とよ）が立ちます。張政は台与に告諭し帰国します。このように外臣が周辺国に攻められた時には、中国は軍隊（軍人）を派遣しました。

朝鮮半島の国々も中国の冊封体制の外臣となります。外臣と外臣はお互いに攻めたり、それから支配したりしてはいけないのです。ところが、今、お話がありましたように、日本は朝鮮半島にたびたび兵を出します。例えば、反正天皇の時に日本の方では、こういう称号を使おうとします。簡単に言いますと、倭と百済、新羅、任那、秦漢、慕漢、この「六国諸軍事」を支配する「使持節都督」であると名乗りたい。「こういうふうに名乗りたい」と中国に言うわけですよ。中国は認めません。外臣が他の外臣の国を支配するのはダメです。中国が許してくれのは「安東大将軍倭王」だけです。東を治める将軍、倭国王。あと全部削られてしま

いました。つまり外交秩序を維持しているのは、中国の冊封体制だったのです。この中で朝鮮半島も日本も、それから南の方も、当時は雲南もそうですけれど、いずれの国も外臣として動いているわけです。卑弥呼の時には実際に、中国から軍隊が入ってきています。いざという時には、中国の軍隊が朝鮮半島経由ですけれども、入ってきました。そういう厳しい冊封体制の中で日本も動いているということです。

伊東　なるほど、冊封体制ね。

欠端　いったん外臣になりますと、それぞれ外臣となった国は義務を課せられます。三年に一回とか五年に一回、朝貢に行かなければならないということです。しかし周辺の国から攻められた時には、中国が軍隊を出して守ってくれるということです。ある意味で核の傘に入るということです。

服部　集団的自衛権ですね。

欠端　この意識は江戸時代まで、私、続いたと思います。

伊東　続いた、確かにそうだ。

欠端　体制自体は崩れましたけれども、外臣としての意識はどこかに残っていたようです。日本の将軍が中国の皇帝に手紙を出す時には、必ず、臣と名乗るわけです。臣何々と。ですから意識的には江戸時代まで続いていて、明治に入ってからも中国から文化人が来ると日本人の歓迎・尊敬ぶりはすごいものでした。明治の人も、もう中国様様（さまざま）です。そういう風土があった。それがガラッと、今度はヨーロッパ中心に変わっていくわけです。大転換だったわけですね。

服部　これは、力の秩序ですか、それとも文化の秩序なのですか。文化的に中華思想が成すものか、あるいは軍事力が作っているものなのか。

欠端　単なる文化力だけではありません。軍事力でもあります。張政という人が朝鮮半島からですけれども、入ってきています。そして日本を、戦闘を鎮めて、それから帰っていくわけです。ですから本当にいざとなったら中国は軍隊を出すという、そういうところがありました。

服部　今のアメリカみたいに。

欠端　アメリカみたいですね。

所　今、欠端先生がおっしゃった事を踏まえて申しますと、だからこそ聖徳太子の外交というのはすごい事なんです。その秩序を何とか変更しようとされた。自主性を取り戻そうとして、結果的に十分成功してないんですけれども、それをあえて言えるような外交をしようとされたのが、聖徳太子だというふうに見れば、非常に重要な事だと思います。

伊東　そうですね。それでこの安東将軍のこれは認められなかった。ここは認められて、他のはダメだというのは、雄略帝のあれですか。そうじゃなくて。

欠端　中国との外交は文書外交です。ですから最初の朝貢のとき（五七年）にも中国文による文書を携えていった筈です。

中国への朝貢の際には文書を持っていかなければなりません。朝鮮と日本との関係は口頭外交です。文書は要りません。ところが中国に関しては文書を出さなければなりませんでした。従ってもう五七年から日本には中国語を理解できる人、中国語を書ける人がかなりいたはずです。それで中国の事情を考えながら手紙を書いて、そして挨拶に行ったという事ですね。その返事がまた返ってくるわけです。その返事の中にこちらの要望にたいする回答があったとおもいます。

伊東　それは誰に対する返事ですか。

所　中国の皇帝。

欠端　皇帝から日本に対して。

伊東　日本の誰に対して。

欠端　奴国なら奴国の王でしょう。

伊東　だけどその時、日本の一番誰か中心がいたわけですか。

欠端　倭の五王（讃、珍、済、興、武）の時代になりますと、反正天皇（珍）以下、允恭天皇（済）、安康天皇（興）、雄略天皇

（武）の時に、中国皇帝に出された要求や、実際に中国に認められた結果などが記録として残されています。倭の五王時代の最初は反正天皇の時の元嘉十五年（四三八年）。です。

伊東　天皇は出てこない段階ですか。

欠端　いえ、倭の王の時代になりますと出てきます。

所　倭王というのはヤマトの大王、のちの天皇のことです。五世紀段階では「倭王」と言われている。仁徳天皇も雄略天皇も倭王です。中国の皇帝が日本の大君＝大王と言われている天皇に宛てた認可状ということになるわけです。

伊東　そうすると、雄略帝があんなふうに言っているんだからすごく本当に、広く占領しているんだろうというのが、どういうことになっちゃうんですか。

所　国内を平定したのみならず、朝鮮半島まで押さえているということを、中国の皇帝に主張することによって、その支配権を正当に認知してもらうということだったわけです。

伊東　でも全面的には認知されなかったんでしょう、それは。

所　いえ、そうではありません。『宋書』倭国伝によれば、順帝は昇明二年（四七八）に倭王武（雄略天皇）の堂々たる上表文に感じ入り、「詔して武を使持節都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事・安東大将軍・倭王に除す」と明記されています。すなわち、五世紀の中ごろ段階で、中国の皇帝は倭王に対して、日本列島の内のみならず、朝鮮南部の諸国に関する日本の領有権を認める称号を与えたわけです。

伊東　なるほど。

所　それは、さっきおっしゃったように、いわばアメリカが日本の朝鮮半島における領有権を認めたような回答を出したわけです。そういう称号が与えられています。

神功皇后のモデル論

伊東　なるほど。そうですか。よろしいでしょうか。欠端先生、いいですね。それではそろそろね、もうフロアの方に移っていいかなと思うんだが、なおもうちょっと神功皇后について所先

生が言われたことに付け足すと、つまり神功皇后は本当に存在したんでしょうかという問題ですよね。これは先生は存在したというお立場ですが。でも、これはモデルがいますね。モデルが、書く時に。誰かと言ったら、斉明天皇ですよね。天智二年（六六三）、これみなさん記憶してください。日本、倭が徹底的に敗北した年なんですよ。新羅と唐の連合軍に白村江の海戦で全滅したんですよ。斉明天皇が亡くなられて、つぎの天智天皇には衝撃でしたね。これ本当に、九州行ってみたけれども、攻めてこられるということを本当に覚悟して、防壁がつくられている。そして大津に都を移したじゃないですか。あれも万が一のとき琵琶湖へ逃げるという準備ですよ。それほどまでの危機に日本は陥ったということです。対新羅に関して。その記憶は強いですね。だからそれを古い話に投影している。この時はやっつけたぞと、今は負けちゃった、ひどい目に、怖くてしょうがないけど、かつてはこういうことがあったんですよという事を言いたいわけです。斉明天皇は女性ですからね。だから紛争モデルのあれは女性でいいんですけど。それじゃあ息長足姫（おきながたらしひめ）という、これが和名でしょう、神功皇后の。これはいったい何を意味しているか。息長足姫というのは、タラシヒコの奥さんということで、あまり意味ないですよ、言ってみれば。要するに仲哀天皇がタラシヒコですからね、その奥さん、息長足姫。そうするとオキナガが問題になると。息長氏というのが天皇の側近になったのは天智、天武の頃ですよ。そこでやっと側近に入ったんです。だから、それで、系図を作る。作ると、天日槍（ぼこ）へ行く、一方においてね。他方において開化天皇へ行く、こういう系図を作り出して、天日槍は新羅から来た。そして天日槍は但馬だ。ずっと但馬の名前がつながっている、系図を見ると。だから丹後、但馬、それから出石ね、この辺と関係があるんですよ。それでそれは、北日本水軍の根拠地ですよ。つまりあそこからずっと水軍が出てね、それでいろんな戦いがあったら、みんなそこで一致団結して助けるわけでしょう。そこの氏族、息長氏に残った伝承が、ここ入っているという感じがするんです。これはどうですか。

所　先生がおっしゃるようなことは、戦後まもないころから強調してきた研究者が何人かおられます。『古事記』『日本書紀』の神功皇后とか、それ以前の記事は、大体七世紀の天智天皇とか天武天皇のあたりの事績を過去に投影させて、それで作った架空の物語だという説が、戦後かなりはやりました。それは今なお同調者がおられます。けれども、私はそうは思いません。

先ほど伊東先生も指摘されたとおり、神功皇后というのは後の

諡（おくりな）であって、もともと気長足姫です。この息長氏が新羅と関係があるということは、ちゃんと『古事記』に書いてあります。さっき申しましたように、神功皇后が九州へ行かれ、さらに朝鮮半島まで行こうとされたのは、祖先との系図の関係からいって、なんらかの人脈があったからだろうと思われます。神功皇后の九州遠征も朝鮮出兵ということも、大筋で四世紀後半段階にあったことだと私には思われます。

伊東　なるほど。

所　それをはっきり示しているのが、四世紀後半段階の高句麗好太王碑です。今の北朝鮮あたりに勢力を持っていた広開土王が、自分の功績を説明して、南の百済も新羅もやっつけた倭軍が、さらに高句麗まで攻め込んできたけれども、それを追い返し、自分たちが勝利を収めた、という手柄を記したのです。それを裏返して言えば、少なくとも四世紀後半の段階で、倭軍が九州からこの百済・新羅まで行って、一時的にせよ服属させた史実があったということになります。

伊東　なるほど。

所　それを明かに示すのが、この四世紀後半の段階で百済の王から日本の倭王に献上された「七支刀」です。これが今なお天理市の石上神宮に伝わっています。いろいろ議論がありますけれども、明らかに本物であり、年代は泰和四年（三六九）だと刻まれています。一部の人々は、これを百済から倭王に献上したものではなく、単なるプレゼントだと主張しています。けれども、これは困難な状況にあった百済を救った倭＝日本に対して、感謝の意を表したものと考えてよいと思われます。

伊東　それは間違いない。

男性一　この「七支刀」というのは、神功皇后のようなヤマト王権のリーダーが新羅などに攻め入って、百済を助けたというような事実がなければ、あんなことは書かれないし、わざわざ七支刀などを贈ってくるようなことはありえないと思われます。

そういう意味で、私は『古事記』『日本書紀』を書く段階で、斉明天皇の陣中崩御とか白村江の戦いなどが、強い意識の中にあったにせよ、それが文章を構成する上で投影をされて造作されたという可能性は少ないと思います。確かに近い時にあった事柄を意識して、過去の歴史を膨らませたりするようなことはあるかも

しれません。しかし、だからと言って、神功皇后がおられなかったとか、朝鮮出兵はなかったとは言えないというふうに思います。

伊東　そこですね、それに対して私に可能な反論は、神功皇后のようなリーダーがいて、そしてかなりの地域を広開土王の碑にあるように占領したのは事実だろうとしても、それはね、私の想定では、それは神功皇后じゃなくて、応神天皇じゃないかと、これを考えてみる必要があるように思う。それで応神朝は宇佐に始まっていますね。それと八幡神という問題。これはここで全然問題にされていません。これは八幡神という八幡様ですよ。これは応神天皇と結び付くんです。これが日本全国にあるじゃないですか。この事実をどう考えるかですよ。この問題と結び付いているのですが。

所　これは非常に鋭いご指摘ですね。いま日本に神社が一〇万近くあると言われていますが、一番多いのは八幡宮なんです。八幡さんっていうのは、今の大分県の宇佐八幡が元で、応神天皇に深い関わりがあります。それがやがて京都の石清水にも、鎌倉の鶴岡にも勧請され、さらに武神としての八幡信仰が全国に広まりました。そういう意味で、八幡信仰とは何なのか、応神天皇ってというのは何なのかっていうのは、非常に重要な問題です。

さっき申しましたように『日本書紀』の中に神功皇后紀が立てられています。その神功皇后というのは、天皇じゃなくて、応神天皇の摂政、お母さんとして息子を助けたという話なんです。そうすると、先生おっしゃったように、応神天皇こそ、本当はカリスマ性のある方だったということは、十分言い得ると思います。

まさに神功皇后がお母さんとしておられ、その息子として応神天皇がおられた。その親子関係により、四世紀後半から五世紀の初めにかけて、国内的にも対外的にもヤマト朝廷の勢力が大いに進展したということは、大筋で言えると思います。それは誰が主役であったのか、また誰が協力者であったのかは議論があっても不思議ではありません。今の先生の読み替えで、神功皇后の功績が応神天皇のものだという見方も、一つの推定としてありうると思われます。

伊東　分かりました。非常に実りある議論だったと思います。これでフロアに移ろうと思うけど、その前にコメンテーターのお二方、何かありますか。

「倭」の民族移動説

服部　ちょっとその前に所先生に私から質問があるのです。ここに出てくる、ヤマト、すなわち、倭国ですよね。これが果たして雲南の倭族と無関係かという問題なのです。何故ならば倭族はいろいろな所に移動をしているのですよ、雲南から。大体雲南に行った少数民族というのは、元来は中国の中原に住んでいた。それが中原を制した漢族によって、住みにくい山の方に追いやられていくのですね。雲南は決して住みやすい所じゃない。住みにくい所に好んで行ったのではない、追われて行ったんですね。こういう動きは北アフリカのベルベル人と同じだと思うんですよ。ベルベル人というのは、北アフリカ海岸にいた原住民なのですが、これが現在はアトラス山脈に住んでいるんです。海岸にはアラブ人が住んでいる。つまりつまり後発民族によって追われて行ったんですよ。もともと一番いい所に住んでいたものが追われていく、セレベスの山奥に、所先生も取り上げられた神明造りの棟持ち柱を持った巨大な住居を構えているトラジャ民族も実はそうなんです。南シナから海を渡り、海岸に住んでいたのが、後で渡来したブギス族によって、山の中へ追われて行ったのです。そうした民族移動を考えますと、倭族もまた例外ではない。雲南に行った少数民族は、メコン河を下れば海に出られるのです。大河メコンの海へ出口がフーナンで、重要な所なのですよ。カンボジアのフーナンは、古代の数々の遺跡が出土するところです。そこから船に乗って、スラヴェジアとかジャワに行ったらしい。するとこれが海の道で、日本までつながる。そういうことを考えますと、この倭国ですが、これシナ側から見た呼び方ですが、これは結び付いている可能性がある。同じ字を使っていますから。というのも中国に昔からある言葉に、「百越百僕」というのがあるのです。百越百僕とは何か。越は移動する民。百僕すなわち少数民族が散り散りに逃げるということですね。海を渡ったものもある。そのカテゴリーの中に現在、雲南に閉じ込められている二十六の少数民族もいたわけですね。だから越という言葉が、越前・越後のように日本の地名に使われていることにも、少し首をかしげなくてはならないのです。あるいはこの百越百僕の越と結び付いているのではないかなと。何故なら今のベトナムに渡った民族がいて、それを越南って呼んでいるじゃないですか。同じ「越」を使っているんです。ですから日本の越は無関係かと疑問があるのです。ですから、「倭」の使い方と「越」の使い方について、所先生のご意見を伺いたい。

所　これは非常に面白い議論でして、昔からいろいろ言われて

います。今先生がおっしゃったような、雲南あたりの倭族が渡ってきたというのは、いつ頃を想定されますか。

服部　トラジャ民族のこと、先生にもぜひ研究していただきたいですね。スラヴェジーにこの民族が渡ったのは紀元前二五〇〇年ころと言われているのです。南シナから。恐らくはフーナン経由で渡ったのが。スマトラにも渡っています。そういう古い民族で、その家屋トンコナンは先ほど先生が出されましたように、まさしく伊勢の棟持柱の形を持っているのです。伊勢の穀倉、稲の御蔵のように高床式にして掘立式。完全に同じ形の穀倉を建てているのですよ。ですからこういうものが完全に無関係だとは思われない。しかもトラジャ民族の中心の作物は稲なのです。そういうことを考えますと、棟持柱というのは説明できるし、伊勢の穀倉も説明できる。また雲南に行きましても、やはり心の御柱があって、大黒柱があって、鳥居があって、しめ縄があって、それで茅葺の家ですね、これが無関係という方が難しいかなと思うんですけど、倭族の場合。

所　おっしゃる通りでしょうが、問題は縄文文化とは何かとか、縄文時代に朝鮮半島か中国大陸より南方系の文化が入ってきたかどうかです。

服部　南方系が先だというのは、梅原猛さんも縄文文化アイヌ説で言っていますね。

所　縄文時代から南方的要素が濃厚に入り込んでおったという意味で、雲南とのつながり等は、説明できると思われます。

もう一つ昔から非常に有名な、呉の太伯渡来説というのがあります。呉の始祖太伯の末裔が日本へ逃れてきて、日本の天皇になったという説は、すでに古代からあるんです。これを江戸時代に水戸光圀などが否定しています。

このような中国の呉とのつながりはともかく、縄文時代からそういうつながりを考えて、両方に共通の要素があるということは、例えば民俗学者の鳥越憲三郎さんあたりも相当前から言われていました。

ただ、われわれが主として議論をしますのは、冒頭で申しましたように、大体弥生以降ですから、縄文時代までさかのぼって民族の移動とか融合ということがあったかどうか、あったとすれば、どういうふうに行われたのか、ぜひ知りたいところです。さきほども欠端先生が問題にされた縄文文化というものは、日本列

島だけの問題じゃなくて、そういう南アジアとも西アジアともつながりのある縄文時代の在り方が議論されなければならないだろうと思います。

服部　私が言いたい事はそういうことで、本当にお言葉を頂いてうれしいのはね、海が道だということなんですよ。陸の道よりも海の道が先にあったと。これは三笠宮がちゃんとおっしゃっていることで、「海は開き、陸は閉ざす」、これが文明史の道だということをちゃんと三笠宮は本に書いておられる。そういうことで、単純な陸上史観はやめて、やっぱり海の道を考えるということでいろんなものが結び付いていくのかなと思いますけど。

所　ありがとうございます。

伊東　欠端先生どうぞ。

欠端　雲南省の少数民族に関して申し上げますと、今年は諏訪の御柱の年ですが佤族(わ)も御柱と同じ事をやっています。

伊東　それではね、そろそろフロアへ回したいと思いますが、最後に、倭の問題が出てきましたね。この倭というのが、初めから日本に限定されていたかどうか、これちょっと再検討する必要がある。今、雲南の倭とか、海の倭とか。むしろ東シナ海、南シナ海あたりをずっと渡り合っていたのが倭である。九州だ、ベトナムだ、あの辺ずっと、倭ではないかと思う。それが、次第に日本列島の方に集中して、日本の別称になっていく。例えば、たしか『漢書』にもベトナムが漢に朝貢した時、倭も朝貢していると書いてあるんですよ。そんな古い時代の倭を、これまで日本のことだと思っていた。ところがそうじゃないかもしれない。これはベトナムの南の方にいた民族の倭らしい。つまり、倭イコール日本になる前の段階がある。もっと広い意味を持っていた。それから南朝鮮にも倭はいた。これも一緒に考えなくてはいけない。あそこの今の国境、対馬のこっちだけ倭だなんて考えたら、全然見当違いになる場合がある。そういう倭の見直しも必要かもしれない。ところでじゃあどうぞ、フロアの質問に移りましょう。

「日本文明」の源流と未来

吉澤　どうもありがとうございました。今日は、主催者の比較文明研究センターの命題にそって、新たに「日本の源流を探る」ということで、大変興味深く拝聴しました。

そこで、質問と申しますか、まず問題の立て方についてお伺いしたいことがあります。今日のシンポジウムは、日本文化・文明の生成と展開について、できるだけ比較文明学の新たな地平から解明したい、ということかと思います。いわゆる、日本文明の「誕生問題」として、広く全体論的に捉えようという趣旨でありましょう。

一般的に申して「文明の誕生問題」には、二つの側面が考慮されるべきでしょう。まず、自己の立つ地域や歴史にそう「内的構造」の問題があります。つぎに自己を外から包む、伊東先生が指摘される「文明交流圏」のような「外的構成」の問題があります。私たちの心得として、当然のことながら、この両者をつなぐ新しい関係枠組みと全体的な展望が不可欠でしょう。

ところで、今回の日本文明の場合はどうでしょうか。私自身では、とくに日本文明の誕生問題として、まず文明の親子関係に立つ「中国文明からの独立」という主題が浮上します。いわゆる、比較文明学上の「中心・周辺文明論」の展開です。通常、大文明に大きく依存して同化吸収されやすい周辺文明の運命として、また中国文明の周辺文明と規定される日本文明の定位にとっても重要です。果たして日本は、独自の創造性や主体性を回復して「独立」をとげたのだろうか。まず、その問題設定と歴史的な検証が必要でしょう。その中で、世界史上の日本文明の定位と未来の可能性が明らかになる、といえるのではないでしょうか。

では、主題の「中国文明からの独立」という命題は、どう解くべきでしょうか。いわゆる、日本文明の独立を示す時期設定とその歴史的要件の検証が必要となります。まず「時期設定」の問題ですが、私は平安中期（九世紀末）の頃かと想定します。今日の所先生のお話では、五世紀頃となりましょうか。その「歴史的要件」を満たす例証としては、さしずめ次のような事項があります。まず、天皇名の変化がみられます。ここでは、詳しく述べる時間もありませんが。その他のおもな事例としは、遣唐使の廃止、律令制度の変質、仏教の土着化、仮名の発明等もあります。いずれも、先進・中国文明の遺産を直接あるいは間接に摂取しながらも、最終的には日本独自の文脈で新しい創造につないでいる。それは、日本文明史上の「最初の画期」ともいえましょう。他ならぬ、中国文明からの独立を告げる証左でもありましょう。そこに、日本文明の境位として、歴史的に周辺文明として出発しながらも、やがて中心文明への飛翔を秘めた有望な文明である、との見方もできます。

以上は、話が長くなりましたが、私なりに今回の「テーマ解題」とも言うべき覚書でもあります。つぎに、この「まえおき」か

ら、新たな質問にうつりましょう。まだ、このシンポジウムで語られていない論点です。それは、比較文明学の、とくに時間軸における全体構成の問題です。申すまでもなく、日本文明の誕生問題は、その「源流」とともに、またその「未来」も語られるべきです。その探究は、申すまでもなく、時間軸の「過去・現在および未来」という全射程をつつむべきです。いわば、日本文明の一種独特の構造や特徴等の解明から、自ずと「文明の未来」に果たすべき使命と役割といった問題が浮上する。具体的には、いわゆる日本文明の多元的な文明体験と申しましょうか、その受容と創造の軌跡が、あるいは多重構造や架橋精神が、たとえば今日の平和価値の定立や地球環境問題等の解決にどう寄与するのだろうか、という問いかけです。新たに「使命志向科学」を標榜する比較文明学の課題としても見逃せません。まず、現在「地球システム・倫理学会」の会長でもいらっしゃる服部先生からお伺いしたい。

服部　私ですか。

伊東　それは重要な質問ですから四人に、簡単に答えていただくことにして、服部先生からまず。

服部　ありがとうございます。吉澤先生のおっしゃった未来的な思考の問題。これはわれわれも本当によく考えなければいけない。一つ言えるのは、日本に見られる多様性ですね、日本には植生だけで、植物の種の数がフランスの一〇倍ある。本当に多様性がある。日本人の源流が一つではなく、北から南から、西から、いろいろな所から来ているのと、ちょうど植生の豊かさと対応していると思うのです。それだけの植物の多様性がこの国にあるのと同じように、われわれの祖先も多様であった。今日もお話にあったように、初期に、五世紀ぐらいまでいろいろな所で皇族も戦っている、そういうことが現にありました。しかし徐々にこの国で形成されてきた「和の精神」、聖徳太子の一七条の憲法が象徴していますけれども、この多様性の中に日本民族は調和を作ってきた。これが非常に大きいと思いますね。現在も将来も外から来た人が日本に感じるのは、和、ハーモニーなのです。ハーモニーとバランス。こういうことが、一番現世界の人々を印象付けていると言っていいと思いますが、私はこれが世界平和に貢献できるものだと思っています。日本が培ってきた、多様性の中のハーモニー、これをさらにわれわれ自身が成熟させて発信すべきではないかと思います。

伊東　それでは欠端先生。

欠端　縄文時代以来の日本文化の基層を考えてみた場合、それは自然崇拝であろうと私は思います。現在でも七〇％近い森林を抱えています。国土の周りは、今、先生がおっしゃいましたが、魚も非常に豊富な海を抱えています。その全ての自然物が「いのち」を持っていて、「いのち」の中に神聖さがある。簡単に言えば、自然＝人＝カミという汎神論的なとらえ方、そのことが日本の縄文以来の文化の基層ではないでしょうか。そして、その億万のいのちが、循環を繰り返しながら永遠に生き続けていく、そういう考え方を日本人は持ってきたと思いますし、これをもう一回、私たち自身が再確認をして、そして世界に向けて訴えていくということができたら素晴らしいなと思います。とにかく今は自然破壊がひどい状況です。持続的な社会を形成しようと思うと、やはり日本人が持ってきた、培ってきた自然崇拝、この考え方を広めていくということが大切ではないかなと思います。

伊東　次に、所先生、お願いします。

所　先生方のお話を聞いて多くのことを学びました。一つだけ付け加えますと、私は日本という国を考えるために、思いついて辞書を調べたら、「東」という字は、『説文』という漢代にできた辞書にも解説がありまして、これは木の上に日が昇ることを表すものとみえます。

中国では殷代からあるようですが、扶桑樹、太陽は桑の木の上に乗っており、そこから昇るという太陽信仰です。それが中国でも周辺でも強くて、太陽の出る方向を非常に尊重するというか、崇拝する。いわば東方信仰、オリエンタリズムかもしれません。先ほど言いました周辺文化というのは、中国を中心として考えた場合なんですが、中国から見ると、日本っていうのは東の方にあって非常に素晴らしい、日の出る元にある国だという認識が、前漢の地理書に出てくるんです。

そういう意味で、内実は分からなかったにせよ、その中国大陸や朝鮮半島の人々にとって、日本海の彼方にある倭・日本が憧れの土地だった。そういう信仰、特に扶桑樹信仰が、例えば古墳の壁画にいっぱい扶桑樹が描いてあるのです。

そういう意味で、日本人を向こうの人が倭と表現した、つまり西の方にいた人々が、東の方の日本を指して、日の本の国だと言ったことが、逆に言われてみればそうだなということを知った日本側で、自分たちの国を「日出ずる処」、もしくは「日の本の国」

と言うふうになったようです。他者の表現が自己の表現になったということは、非常に面白い事だと思います。

そこで、あえて結び付けますと、日本の立ち位置はまさにアジアの東にあって、そこが文明の吹き溜まりです。さきほど服部先生がおっしゃったとおり、あらゆるものが入ってきて、この中で調和される。ここから吹き抜けて太平洋の彼方に行ってしまわないで、日本に留まり融合して、さらに新しいものを作り出してきた。そういう意味で、まさにユーラシアの、とくにアジア大陸の東にある強みというか特徴というものが、まさに日本文化・日本文明を作ってきたといえるのではないでしょうか。

今後この日本が日本列島にあることは永久に変わらないとするならば、ここにあること、東西の接点にあり、世界をながめて、文明の在り方を考える。本当に恵まれた場所にあるということを、決して自慢するんじゃなくて、それを活かしながら、西も東も北も南もつなぎ融和する役割を果たせたらと、自分なりに思っております。

伊東　それでは最後に、吉澤先生の質問に対して私が申し上げておきます。日本文明の未来という事。それはやっぱりもうすでにいろんな方がおっしゃっているけど、生態的に言ってもね、社会的に言ってもね、いろんな意味で、いろんなものが入り込んで、多様性を作っている。一は他を退けるっていうことではないんですよ。これは今日のお話でも、出雲大社と伊勢神宮の原型が並んでいるじゃないですか。これは日本の文化の象徴だと思いますね。両方とも大きな力持っているけど、最後は握手しているじゃないですか。それが一緒なんですよ。それが、ずっと行われているのが日本の文化。

ところが他方において、違った文明の中では自己を中心にして、他を排斥してしまう。そういうエクスクルージョンという、他を排斥するっていう文明の在り方ありますよね。かつてヨーロッパ文明もそういうところがあった。イスラムがまだあるかもしれない。だけどそうじゃないんだ。いろんなものがあっていいですよと。それこそ百花斉放でね、いろいろ花咲かせてくださいと。こういえる文明じゃないかと思う。

そうすると、巡り巡って、憲法九条、平和憲法ね。その平和憲法を巡り巡って今われわれ持っていますよね。あれ日本の本来の姿なんじゃないかな。つまり押しつけられたものとか、何とかじゃなくて、入ってきた契機は敗戦が関わったかもしれないが、あれはそういう日本人の底層の思想にあるものが表に出てきている。だからこれは私は揺るがないと思う。そうして、そういう立

場から、地球社会の平和的共存、排他的なものじゃなくて、何とか矛盾もあり対立もあるが、一緒にやっていくという文明のモデルを日本は示すべきだし、示したいというふうに思うんですね。これは二十一世紀の地球社会にとって必要なものではないか。

これで今日のシンポジウムの結論らしきものが出たんじゃないだろうか。長時間にわたり、我々の開かれた自由な討論につき合って下さって、どうもありがとうございました。

立木　先生方、本日はまことに充実したシンポジウムを実現していただき、誠にありがとうございました。それぞれ専門を深く極められた碩学による、専門領域を超えた議論を展開していただきました。会場の皆様におかれましても、当麗澤大学の比較文明文化研究センターがいかに開かれた研究センターであるか、おわかりいただけたことと思います。互いに尊敬しあって繰り広げられた本日の議論は、必ずや日本史研究に新たな次元を切り拓くことになるものと思います。皆様、最後に盛大な拍手をお願いいたします。ありがとうございました。

大和朝廷の発展過程

（西紀前）
ⓐ 天穂日命降臨
ⓑ 饒速日命降臨
ⓒ 瓊瓊杵尊降臨

1（一世紀）
① **神武天皇の東征**
橿原宮で即位
② 綏靖天皇
57 倭の奴国王
後漢に朝貢
③ 安寧天皇

101（二世紀）
④ 懿徳天皇
⑤ 孝昭天皇
⑥ 孝安天皇
⑦ 孝霊天皇
⑧ 孝元天皇
⑨ 開化天皇

201（三世紀）
⑩ **崇神天皇**
四道将軍の派遣
239 倭女王卑弥呼
魏に朝貢
⑪ 垂仁天皇
伊勢内宮の創祀

301（四世紀）
⑫ 景行天皇
日本武尊の遠征
⑬ 成務天皇
⑭ 仲哀天皇
神功皇后の遠征
369 百済 → 七支刀
391 朝鮮に進攻

401（五世紀）
⑮ 応神天皇
421 倭王讃、宋に朝貢
⑯ **仁徳天皇**（讃王）
⑲ 允恭天皇（済王）
㉑ 雄略天皇（武王）

【付録１】

平成 28 年（2016）6 月 15 日　麗澤大学比較文明文化研究センター公開シンポジウム資料

「日本」の源流を探る—「ヤマト文化」から「日本文明」まで

（客員研究員）　所　功

「文化」…漢語：文徳で教化すること（説苑）　洋語：cultura　地域的・自然的な知恵の所産

「文明」…漢語：学文で明るくなること（書経）　洋語：civilizatio　都会的・人為的な知識の所産

Ⅰ　先史時代の日本列島

石器文化の時代…打製旧石器→約 3 万年前から磨製新石器、ユーラシア大陸と地続き（～約 1 万 5 千年前）

縄文文化の時代…約 BC1 万 3000 年（弧状列島成立）～約 BC5 世紀（地域差あり）

定住化（三内丸山遺跡～上野原遺跡）、**土偶信仰（母性尊重）**、黒曜石・ヒスイ（広域交易）

㋑「縄文時代においても（北海道以外の）全日本に日本語系統の言語が広く分布していた」（服部四郎氏『日本語の系統』〈初版、昭和 34→岩波文庫、平成 11〉）

弥生文化の時代…BC4 世紀～AD3 世紀（地域差あり）

水稲耕作（→「瑞穂の国」）「春耕し秋収む」/高床住居・環濠集落など普及（**男性中心化**）

㋺「日本建国（原注、西暦 1 世紀ないし 3 世紀）以前に北九州から南島（沖縄など）に住民移動があった。」（伊波普猷氏『沖縄歴史物語』〈初版、昭和 22→平凡社ライブラリー、平成 10〉）

㋩「北部九州…では…（弥生）後期以降は墳丘墓が発達しない。他方で近畿…では…終末期以降、突如大型墳丘墓（前方後円墳・前方後方墳）が発達する」（岩永省三氏「弥生時代における首長層の成長と墳丘墓の発達」『九州大学総合研究博物館研究報告』8 号、平成 22 年）→近畿への移動？

Ⅱ　AD1～5 世紀の日本列島

中国の編年史書に見える「倭」……3 世紀ころまでは北九州域→4 世紀以降は大和（日本）全体

朝鮮の史書・碑文にみえる「倭」…369　百済王の世子→「倭王」に造刀贈呈、391「倭軍」→百済・新羅に進攻

記・紀に見える**大和朝廷の国内統一**…**1 神武東征（1C）**～10 崇神（3C 前半）・11 垂仁（3C 後半）・12 景行（4C 前半）

考古遺蹟に見えるヤマト王権の発展…**前方後円墳（3C 初～5C）の全国拡大**（日のタテ＝東西→日のヨコ＝南北）

纒向遺跡（3C 前半～）…高床**穀倉**（→伊勢神宮）と高床**宮殿**（→出雲大社）の成立

㋥『万葉集』巻一・1（**雄略天皇御製**）「籠もよみ籠持ち　掘串(ふくし)もよ　み掘串持ち　この岳に菜摘ます子（娘）家聞かな　名告(の)らさね　**そらみつ大跡（やまと）の国は　おしなべてわれこそ居れ　しきなべてわれこそ座せ**われにこそは告らめ　家をも名をも」（大和言葉、七五調／琉歌は八六調）

㋭埼玉県行田市の稲荷山古墳出土鉄剣銘文「**辛亥の年（471）**七月中記す。**乎獲居（をわけ）の臣、上祖の名は意富比垝（大彦命**、以下七代省略）…**世々杖刀人（内廷武官）の首**となり、奉事し来り今に至る。**獲加多支鹵（わかたける、幼武＝雄略）大王の寺（廷）、斯鬼（シキ、磯城の朝倉）の宮に在る時、吾、天下を治ることを左（たす）く**」

※熊本県玉名郡の江田船山古墳出土大刀銘文「**治天下獲加多支鹵大王の世、奉事典曹人（外交文官）**、名は无利弖…八十たび練り九十たび捃じたる三寸上好の刀、此の刀を服する者は**長寿にして子孫洋々、其の恩を得るなり**。」

㋬『宋書』東夷伝・倭国条「**昇明二年（478）**、使を遣し上表していはく…**昔より祖禰、躬ら甲冑を擐き、山川を跋渉して寧處に遑あらず。東は毛人を征する**こと五十五国、**西は衆夷を服する**こと六十六国、**渡りて海北（朝鮮半島）を平ぐる**こと九十五国、**王道融泰**なり…」

ヤマト文化（地域性）：列島文化の形成融合（**大和言葉・自然信仰・家族的協働**…）→持続（基層文化）

ニホン文明（普遍性）：大陸文明の摂取活用（**漢字による儒学・仏教・律令・年号・詩文**…）→国風化（和魂漢才）

ex.　国号：**ヤマト・倭**（北九州→近畿→全国）→**日本**（→JIPANG, JAPAN）

ex.　法制：**ノリ**→法（→law）　家族：**おもちち**→父母　**めおと**→夫婦　**いもせ**→兄妹

ex.　数詞：ひ・ふ・み・よ……こ・と（そ）・ほ（もも）・ち→　一・二・三・四……九、十・百・千

【付録２】

「ヤマト国家の形成過程」関係略年譜

平成28年(2016)6月15日　所　功

	BC202　秦・始皇帝、中国（シナ）統一	○北九州から弥生稲作文化発達（古来の粟芋作も）
	BC108　漢の武帝、朝鮮に楽浪郡を設置	○倭人（北九州）、百余国に分立
1C	25　後漢の光武帝、新を倒し即位	**○神武天皇、九州から畿内へ東征（1C初頃か）**
1C	57「倭奴国王」　後漢に朝貢、光武帝より金印授与	107「倭（北九州）国王」　後漢に「生口」を献上
2C	147～149　後漢の桓帝・霊帝	○数十年「倭国大乱」（倭国王男子→女王卑弥呼共立）（銅鐸・銅鏡）
3C	220　後漢滅び、魏・呉・蜀の三国時代	**○崇神天皇、磯城「水垣宮」から四道将軍を派遣（3C前半）**
3C	239　倭女王卑弥呼、魏の明帝から「親魏倭王」受封	**※古墳文化**の時代　特に**前方後円墳、全国に拡大**（3C初～5C）
3C	261　魏を滅ぼした西晋に、倭女王（台与）朝貢	**○垂仁天皇、出雲の神宝検校、伊勢に皇祖神奉祀（3C後半）**
4C	316　西晋が滅び、五胡十六国時代	**○景行天皇の皇子「倭建命」、九州・東国に遠征（4C前半）**
4C	346　百済、馬韓統一　356新羅、辰韓統一	**○神功皇后、北九州から新羅に出征（4C後半）**
4C	372　**百済王から369の「七枝刀」など贈呈**	**○応神天皇朝、百済から「論語」「千字文」（儒教・漢語）など伝来**
4C	391　**倭軍、百済・新羅らを破る**　404　倭軍、高句麗と戦い大敗。428頃　仁徳天皇の山陵築造	
5C	421・425　倭王讃（仁徳天皇か履中天皇）宋に朝貢	438　倭王珍（反正天皇か）宋より「安東将軍倭国王」授認
5C	443・451　倭王済（允恭天皇）宋に朝貢　461　「斯麻王」（のち武寧王）筑紫の各羅（唐津）島で誕生	
5C	462　倭王興（安康天皇か）宋に朝貢	471　**「獲加多支鹵大王」（倭王武＝雄略天皇）「天下を治む」**
5C		478　**倭王武（雄略天皇）宋の順帝に上表（国内統一、海北平定）**
6C		507　**大伴金村ら「男大迹王」（応神五世孫、継体天皇）擁立**
6C	513　**百済より五経博士ら来日（554にも）**	527　**筑紫国造磐井、新羅と結託し反乱**
6C	538　**百済の聖明王、日本に仏像・経典を贈る**（日本書紀では552）　588　飛鳥に「法興寺」造立（**私年号「法興」**）	
6C	592　**推古女帝即位**、593　**聖徳太子摂政**（～622）	600　隋に使を派遣（**倭王アメタリシヒコ＝アメキミ　天王**）
7C	604　**「憲法十七条」**制定　冠位十二階制定	607　**遣隋使の国書「日出処天子」→608「東天皇」**　（→**「日本」「天皇」**）
7C	645　**「大化改新」**（畿内・諸道・国・評・里制など）	670　**天智天皇「庚午年籍」**　663　**斉明女帝、百済救援（白村江の戦）**
7C	672　**弘文天皇と叔父大海人皇子の争（壬申の乱）**	673 **天武天皇、ユキ・スキの収穫で大嘗祭**
7C	681　**天武天皇、「律令」「国史」の編纂開始**（→701**「大宝律令」**　712**「古事記」**　718**「養老律令」**　720**「日本書紀」**）	
7C	689　**持統女帝、唐風の即位式**　690・692　**伊勢神宮の式年遷宮開始**	694　**藤原京に遷都**（→710 平城京・794 平安京）

津田左右吉（明治6～昭和36年）**『古事記及日本書紀の研究』（岩波書店、大正12年）→**
「建国の事情と万世一系の思想」（『世界』昭和21年4月号→岩波文庫『津田左右吉歴史論集』平成18年）

①キュウシュウ地方の諸君主が得たシナの工藝品や…種々の知識は…早くから後のいはゆる**キンキ地方**に伝へられ、**一・二世紀の頃**にはその地域に文化の中心が形づくられ、さうしてそれには、その地方を領有する**政治的勢力の存在**が伴つてゐたことが考へられる。

②この**政治的勢力は…皇室の御祖先を君主とする**もので…ヤマトがその中心となつてゐたであらう。

③**三世紀には**、その領土が次第に広がって、西のほうではセト内海の沿岸地方…（東は）**トウホク地方でもかなりの遠方まで、その勢力範囲に入った**らしく想像せられるが…キュウシュウ地方にはまだ進出できなかった。

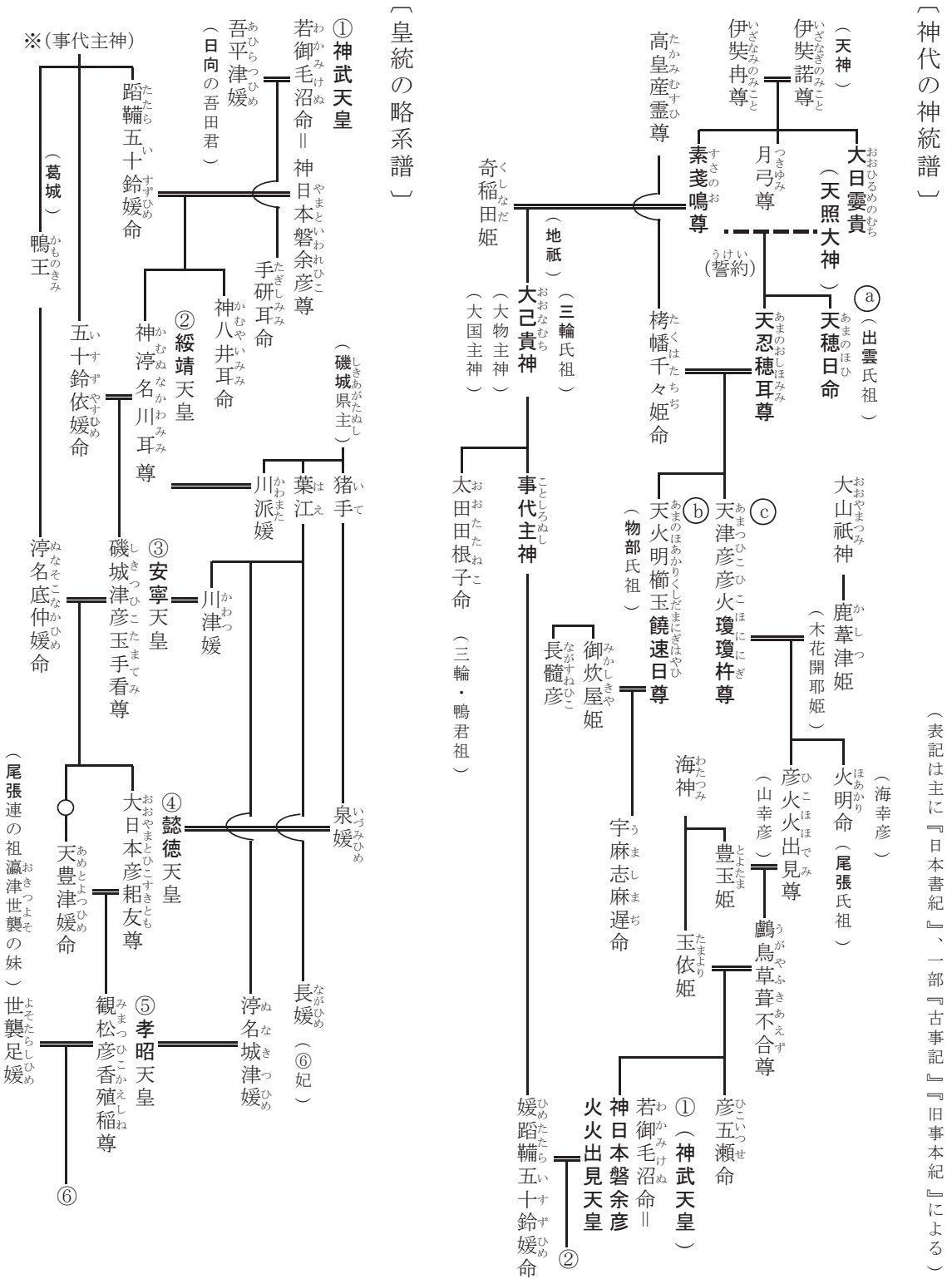
④**四世紀に入るとまもなく…ヤマト（朝廷）の勢は…キュウシュウの地に進出**し、…ヤマト（邪馬台）の国とを服属させたらしい。

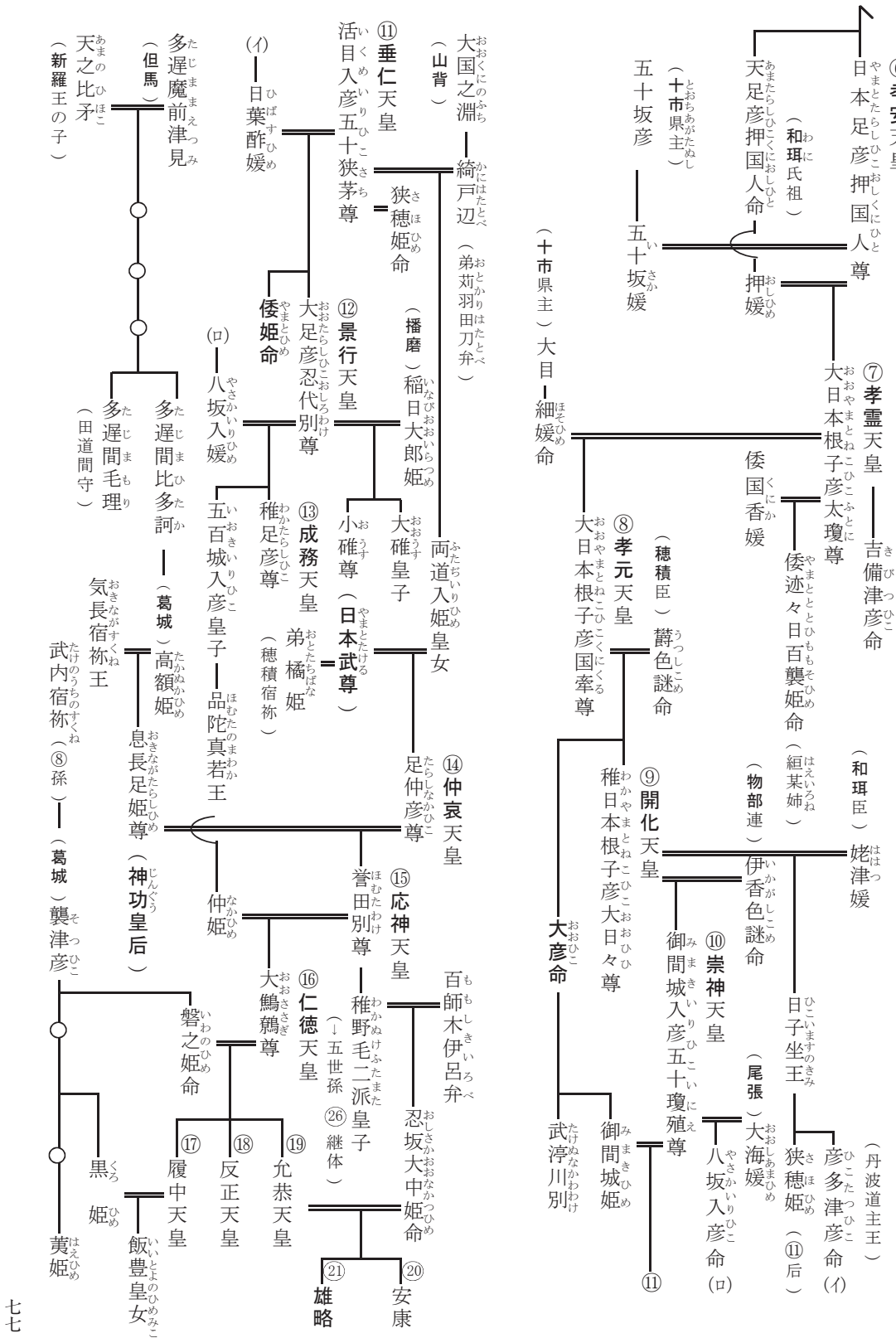
⑤この勢いの一歩を進めたのが、**四世紀の後半におけるヤマト朝廷の勢力の（朝鮮）半島への進出**であって…朝廷に採り入れられた**シナの文物（漢字・暦術など）が皇室の権威を一層強め…一つの国家としての日本民族の統一を固めてゆく**はたらきをすることになる…

⑥**歴代の天皇の系譜については、ほぼ三世紀の頃であらうと思はれるスシン（崇神）天皇からあとは、歴史的の存在**として見られよう。それより前の…**創業の主ともいふべき君主のあったことは、何らかのかたちでのちに言ひ伝へられたか**と想像せられる…

⑦**国民的統合の中心であり国民的精神の生きた象徴**であられるところに、皇室の存在の意義がある…
国民の内部にあられるが故に、**皇室は**…国民が父祖子孫相承けて無窮に継続すると同じく、**その国民とともに万世一系**なのである。

【付録３】


〔神代の神統譜〕
（天神）
伊弉諾尊
伊弉冉尊
大日霎貴（天照大神）
月弓尊
素戔嗚尊
（誓約）
ⓐ（出雲氏祖）
天穂日命
高皇産霊尊
奇稲田姫
（地祇）
大己貴神
（三輪氏祖）
（大物主神）
（大国主神）
事代主神
太田田根子命（三輪・鴨君祖）
栲幡千々姫命
天忍穂耳尊
ⓑ天火明櫛玉饒速日尊（物部氏祖）
ⓒ天津彦彦火瓊瓊杵尊
大山祇神
鹿葦津姫（木花開耶姫）
御炊屋姫
長髄彦
宇麻志麻遅命
海神
豊玉姫
玉依姫
彦火火出見尊（山幸彦）
火明命（尾張氏祖）（海幸彦）
鸕鳥草葺不合尊
彦五瀬命
①（神武天皇）
若御毛沼命＝
神日本磐余彦
火火出見天皇
②
媛蹈鞴五十鈴媛命
（表記は主に『日本書紀』、一部『古事記』『旧事本紀』による）
〔皇統の略系譜〕
①神武天皇
若御毛沼命＝神日本磐余彦尊
吾平津媛（日向の吾田君）
手研耳命
神八井耳命
蹈鞴五十鈴媛命
②綏靖天皇
神渟名川耳尊
五十鈴依媛命
（磯城県主）
猪手
葉江
川派媛
泉媛
③安寧天皇
川津媛
磯城津彦玉手看尊
渟名底仲媛命
④懿徳天皇
大日本彦耜友尊
天豊津媛命
長媛（⑥妃）
⑤孝昭天皇
観松彦香殖稲尊
渟名城津媛
⑥
世襲足媛（尾張連の祖瀛津世襲の妹）
※（事代主神）
（葛城）
鴨王


⑥孝安天皇
日本足彦押国人尊
天足彦押国人命
（和珥氏祖）
五十坂彦
（十市県主）
五十坂媛
押媛
⑦孝霊天皇
大日本根子彦太瓊尊
吉備津彦命
（十市県主）大目
細媛命
倭国香媛
倭迹々日百襲姫命
（紐某姉）
（物部連）
（和珥臣）
姥津媛
⑧孝元天皇
大日本根子彦国牽尊
（穂積臣）
欝色謎命
⑨開化天皇
稚日本根子彦大日々尊
伊香色謎命
大彦命
御間城入彦五十瓊殖尊
⑩崇神天皇
（尾張）大海媛
八坂入彦命（ロ）
⑪
武渟川別
御間城姫
日子坐王
（丹波道主王）
彦多津彦命（イ）
狭穂姫（⑪后）
大国之淵
（山背）
綺戸辺（弟苅羽田刀弁）
両道入姫皇女
⑪垂仁天皇
活目入彦五十狭茅尊
狭穂姫命
（播磨）稲日大郎姫
⑫景行天皇
大足彦忍代別尊
倭姫命
（イ）日葉酢媛
（ロ）八坂入媛
小碓尊（日本武尊）
大碓皇子
⑬成務天皇
稚足彦尊
（穂積宿祢）
弟橘姫
五百城入彦皇子
品陀真若王
⑭仲哀天皇
足仲彦尊
誉田別尊
⑮応神天皇
稚野毛二派皇子
（↓五世孫 ㉖継体）
百師木伊呂弁
忍坂大中姫命
⑳安康
㉑雄略
仲姫
大鷦鷯尊
⑯仁徳天皇
磐之姫命
⑰履中天皇
⑱反正天皇
⑲允恭天皇
飯豊皇女
多遅魔前津見
（但馬）
天之比矛
（新羅王の子）
多遅間比多訶
（葛城）高額姫
多遅間毛理
（田道間守）
気長宿祢王
息長足姫尊（神功皇后）
武内宿祢（⑧孫）
（葛城）襲津彦
黒姫
黄姫